

ゴリラ的人生哲学

ヤンヌルカナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

”唯の”ゴリラとして生を受けた男が原作のあらゆる悲劇を粉砕しまくる話。

「私はゴリラに生を受けたらしい。」

作者の性癖を満たすために書いていきます。

目次

その名も齧理羅

”唯の”ゴリラになった男 | 1

ワタシとゴリラと元ヒトと | 3

我、ゴリラたれ | 6

人間とヒトとグールと”ゴリラ” | 9

学名 GODZILLA || gorilla || gorilla

11

”江田島動物園案内パンフレット” (激派手色使い) | 14

ゴリラのラリゴ | 17

ゴリラとミミズク | 23

圧倒的！圧倒的ゴリラ！ | 26

弛まぬ齧理羅 | 29

VはV a n a n a のV | 33

VはV a n a n a のV : 2 | 36

V a n a n a a f f a i r | 38

美少女に声かけちゃう系ゴリラ | 41

俺の名はゴリフレッド | 44

食べることは生きること | 47

ゴリラのカラダ | 51

その頃相方は： | 54

社畜とゴリバニズム

ロマと三食ゴリラ昼寝付きセット | 56

となりのゴリラ | 59

だが、ゴリラ | 61

アニキはいった、ゴリラはこええ	64
枯れ木に水をあげましょう	69
ゴリ友	72
ゴリ友：2	75
ゴリの大兄貴	78
ゴリの大兄貴：2	82
ゴリバニズム	87
ネズミ小僧とゴリラ坊主	91
賑やかになる職場、増える隣人、逃げるゴリラ	
超大型（物理）新人フレッド君	96
ゴリラと食災被害者上司三人組	99
ゴリラの貯金と貧しい食事！（カイジ並感）	101
今日は俺たちの奢りだ！（死亡フラグ）	104
俺はウリウリ	110
つまらないものですが	114
ガチムチ肉体指導モードカツコガチ	117
空くまでもなく ウタside	123
開けて居る ウタside	127
甘えてもいいんだよ？（脳筋）	131
闘魂カウンセラー	140
君臨するし統治するし	147
20区的首領	151

その名も齧理羅

”唯の”ゴリラになつた男

まぶたの裏が眩しくて目を開けた。

ここはどこだろうか。随分と野性味が溢れるトコロで目が覚めた。あたりは透明で分厚い膜に覆われている。

その隔たりを介して、こちらを眺める存在がいた。

あつ、猿だ。

昨日は確かにもつと文明的な寢床で眠っていたはずだ。

本来なら私はここにいないはずがないのだが。

そんな感情を最初に抱いた。

しかし、何もしないで呆けていてもラチが開かない。

しばらくはこの暮らしを満喫してみようと思う。

そんな樂觀的な気分で今一度まだ日の照らす空の下、随分逞しくなつた自らの腕を枕にまだ温い寢床に横になつた。

視界の隅に大きく黒い塊が見えたが気にせず眠つた。

ふと、周囲の騒がしさに目が覚めた。

そういえばナニカがあつたな。気になつて眠る直前に視界の隅に入ってきた大きな黒い塊の方に目を向け…………

ゴリラであつた。

そんな単語が、それまで冷静を保つた振りをしてきた我が思考回路を徹底的に崩壊せしめた。

ワツ、といった具合に風船から空気が抜けるような勢いで自分の肩を抱き、改めて冷静になろうと思つた矢先。

私の体が目の前の巨獣と同等かそれ以上の巨軀を誇つているという錯覚を覚えた。

どうにも小さいのだ。いや、私が大きいのか。体の大きさなど。

自分の存在がどういふものなのか確認することに比べて、毛ほども

大事ではないのだが、わかりやすく示された答えに飛びつきたくないという自分の中の理性なのだろうか、

私は自分が”ゴリラ”であることを認めたくない一心で自分の体の大きさに思考を割いた。

ああ、立派な体じゃないか。引き締まっているし、何より逞しい。

そ、それになあ：そうだそうだ、コイツは分厚い掌だ。あ、あ。

あああ：それと、えー。強靱な顎？牙？：：：をしているな。な、なんでも食べられそうだな。

柄にも無くうろたえ、暫く冷静さをかいて現実逃避に精をだした。

考えれば考えるほど、自分の体が人間ではないという結論が近づいてくる。体表にはゴワゴワとして、お世辞にも手触りがイイとは言えない黒い体毛。背筋を真っ直ぐに伸ばすのば面倒に感じる。掌は分厚く黒々とした表皮がのぞいている。

身体の、心の方の持ち様はゴリラとは言えないかもしれないが…。

自分の体をじっくりと舐め回すように眺めたあと。

悩みつつ顔を上げた。私の四方を塞ぐ分厚い展示窓に、どこからか差し込んだ光が、頗る厳つい、その種の元来のイメージを体現するような、そんなゴリラを反射している。

到底理解は追いついていない。

夢であつてくれ。そう願いながら私は思考の停滞を解き放ち、確かに私の置かれた状況を心中で言葉にした。

私はゴリラに生を受けたらしい。

ワタシとゴリラと元ヒトと

ゴリラとして生を受ける。

字面だけで見れば、まあ。

生物の誕生としては何ら違和感も感慨も抱かないだろう。

現に私もそうである。

自分の姿形を展示窓の反射で確認したあと、私は崩れ落ちるようにその場に座り込んだ。

頭に浮かぶのは、いわゆる前世とでも言うものだろうか。

ヒトとして生を受けて、便利で多様に発達した社会で育った。

両親は仲が良く、兄弟もいた。昨今問題となっている核家族というわけでもなかった。祖父母間の関係も良好であったし、家族皆日々穏やかに生を謳歌していた。

そう、穏やかに。穏やかに生きていたのである。

時代は平成から令和に入り、私も一つ時代を跨いだのだな、などと確かな高揚に近い感情を抱いた。

無論、世界中で未だに争いや飢え、負の側面の繁栄が途絶えないことは間違いなかったが、そんなことは万人が知っていて、万人が意識の外に放っていた。

生まれは日本だった。正に平和である。

政治家はヘマをしても殺されないし。

戦争反対は挨拶と同じくらい何にも考えずに叫んでいる。

非核三原則はノーベル賞をとったが、核保有国との親愛には勝らないらしい。

他国からのスパイ対策は暖簾の如し、対他国のインテリジェンスは吹けば飛ぶように貧弱。

医療保険は、水道やらの修理以上に安く済むのに、携帯料金は高いと言う。

生活保護はあるし、憲法は文化的な生活を国民に約束している。

会社は白黒入り乱れ。準備もスカンピンなのに、外国人を受け入れる。

よくわからない、サマータイムやら特別な金曜日やら、ノー残業やら、イクメンやら…

そんな、軽く考えても随分濁った国に生まれたのだ。

まだまだ、変わったところも面白いところもいろいろある。

しかしはつきり分かるのは、どこまで行ってもどこか享樂的なのだということだ。

私も十分享樂的であった。漫画は読むし、アニメも見る、他人には言えない性癖もあったし、無論マスターベーションもする。

蚊は潰すし、菓子も肉も食う、課題をやらずにふて寝ましたし、兎にも角にも楽しむことはできていた。

堪え性もなかったが、些細なことで手や脚のするような気の悪いヒトでもなかったと思う。

さてさて、一通り自分は確かにヒトであったということを確認したところで、改めて自分の今を考えてみる。

穏やかに、享樂的に暮らしていた、そんな文明人の私がどうしてゴリラになれるようか。

一体全体、何が作用して私はコンナものになってしまったのだろうか。

答えも出ないが、かと言って不満がない自分の今の心境に心穏やかではいられないのであった。

逸る気持ちに押されるように、原因究明を目標に”ヒト”であった、最後の日を思い出す。

あの日、私は学校からスツカリ疲れてしまって、汗を流すとすぐさまに、何をする気も起きないままに、ベッドの上に寝転んだ。ズボラながらも、肌が汗でベタつくことを許すほどの寛容さは持ち合わせていなかったのである。私は潔癖症ではなかったが、清潔を好む普遍的なヒトでもあった。

間も無く眠りについた、目覚めれば現在の有様である。

その後散々に理由を求めても、最後の日にはなんら心当たりがない。

納得も安心も出来ず、今の宙ぶらりんの自分の在り様に恐怖し、他に何か心当たりを探して、自身の懐を物色した。

見つけた心当りは案外と単純なものだった。

私は身体を壊しやすいヒトでもあった。

心が弱く、些事ですぐにストレス性の腹痛に襲われた。慢性的な腹痛は長く長く私を苦しめていた。

そのせいで、よく休んだ。起立性調節障害というものも小学5年の時より患い、自分への不理解を恐れる中でボチボチと付き合っていた。

体の表面だけでも何か誇れるものをもとう、威を纏おうとして体を鍛えた。しかし、思うようにはいかず、鍛えては体調を崩しての繰り返しであった。

私の自己同一性は常に拭えない悔しさや、やり切れなさ、情けなさと同居していた。

ようはコンプレックスである。

我、ゴリラたれ

私は、ヒトであった時のジブンを表すのに容易な言葉を選ぶ。
弱い自分。

情けない自分。

軟弱な自分。

病弱な自分。

病弱なのに大病を患わなかった。

筋肉を鍛えているのに、そのせいで体調を崩した。

もはやヒトとしての面影も残っていない過去のジブンへの回顧は

あまり良いものではないな。

そう考えて思考をやめた。

一方で、だ。今の私はどうであろうか。

筋肉モリモリマツチョマンの変態も真っ青の全身筋肉達磨。

その巨軀の前では誰もが竦むだろう2メートルを優に超す、圧倒的
威容。

黒々とした、今の私の強靱な肉体からはそんな印象を感じる。

というよりも、なんだか”ただの”ゴリラにしては大き過ぎる気も
する。

まあ、そんなことは今は思考の無駄である。

ある意味、今の私は相当に満ち足りている。

ゴリラという生き物は、私の知る限りだと

穏やかで

筋肉もりもりで

ストレスに弱くて

争いを好まない

そんなイメージがある。

ストレスが弱いのは愛嬌だ。そうに違いない。

そんなことよりも、筋骨隆々であることが重要であった。

それに限らず、強靱な自分というものにたどり着く一方で、ストレ
スに弱い軟弱さを捨て切れていないというところが、今やゴリラと

なった私に、ヒトで会った頃の面影を感じさせた。

これは、ジブンが良い意味で変わったという喜びを噛み締めるための、一種のスパイスに他ならなかった。

しかし、先ほど思い浮かべたゴリラの印象と比べて、意外にも、今の私は争いは嫌いなのだという感覚が薄かった。

穏やかを尊ぶ心持ちは言うまでもなく天元突破状態であったが。

こういうのも興味深い、今の自分の有り様は言ってしまうえば暇人とも言える。思考に時間をほとんど割いてお釣りが来るだろう。

だが、今の私はゴリラとしてどうだ、と思うのだ。もつとゴリラらしく、ゴリ凛々しい様を、この他の追隨を許さない威容を持って示すべきではないかと、そう思うのである。

そのために必要なことは、私の中の逞しさの解放に他ならない。

私はすぐさま行動を開始した。これが一時的とはいえ大きな混乱を呼び起こすとは知らずに…

「ウホツウホツ??ウホホウホツ!!? (ウオー!!?) 我がドラミングの力強さに酔いしれるがいいイイ!!?)」

展示窓の向こう側

「えっ…!!? な、なんだよ、なんだよ…アイツいきなりどうしたんだ?」

「わからないけど、なんか面白いね〜プフツ! 何あれ、すごいゴリラっぽいわww」

「いやいや、アレはゴリラなんだから普通じゃね?」

「そっか。いや、でも、アハハハツ、流石にこれはやり過ぎでしょ!」

「うおあ! なんだよアレ! グルグル回ってるぞ。今日は珍しいもん見ちまったなあ。」

「なあなあ、動画! 動画! これは話題になるって。みんなにも見せようよ!」

「おう、そうだな…ってかアイツ周りのゴリラに引かれてんぞ! ウケるww」

「ウホ？ウホホ？（おかしい。明らかにおかしい…なんだか馬鹿にされてある気がする。）」

明らかにゴリラっぽさを追求した結果。

彼が行ったドラミングは、腕を幼子のように大振りに振りたくる、なんとも滑稽にキマツてしまっていた。

さらに、そのような滑稽極まりない様に飽き足らず、本来言うわけがない

ウホウホという、典型的なゴリラの鳴き真似を、ゴリラがしているのだから、滑稽な様に磨きがかけれまくり、四方の展示窓を周回する健気なのか、陽気なのかよくわからない行動と相まって、その日からしばらくの間

”はぶられゴリラ”としてネット上でボツチアニキの仲間入りを果たしたのはまた別の話。

人間とヒトとグールと”ゴリラ”

いつからだろうか。

其の存在が世界から、即ち社会から、即ちヒトから明確に存在を認められたのは。

いつからだろうか。

其の存在がヒトではなくなったのは。

いつからだろうか。

其の存在が人間となったのは。

「(はあく、暇だ。)」

「(全く以て暇だ。まあ、暇なのはいいとして。なんなんだ、一体！なあにが、”ハブられゴリラ乙々”だ！ニンゲン！オマエ！…私も人間だったわ…)」

「(いや、たしかにね、たあしかに、周りのゴリラ達が一切私に興味を示さないというのは異常だな、とは思ったけども。そんなこと気づかないから！ま、今ならわかるけどね。アキラかに俺がハブられているということが。そもそも存在が認められていないのでは？という勢いがあるな全く。)

まあ、ゴリラにもてても仕方ないか。)」

「(大体、ゴリラ初日、正確には二日目の寝起きの初めてのゴリラ一年生にそんなことわかるわけがないだろうおお！馬鹿にされると言ってもここまでとは、ハアアアアアアアアアア。何にしてもまさか、ウホウホという発音が明確に自分の口から発せられて、しかもそれを聞き取られる、もとい録音されてばら撒かれるというね…死ゾ？意識だけとはいえ、生まれ落ちて早二日目にして社会的に死亡済みというRTA。コイツア、スゲエヤ！我がゴリラ生、悔いありまくり。)」

不気味すぎるほどに明確な発音で彼の口から発せられた”日本語”が周囲に聞こえることはなかった。彼はまもなく口から漏れ出ているのが、明確に人間の言語であることに驚きを隠せていなかった

が、それ以上に驚いたのは自分の真正面の分厚い展示窓の向こうで会話していた軽薄そうな男女の声が聞こえるということ、そしてその言語が日本語であるということだった、

「ー最近また被害者が出たんだよね。ーグールに襲われたつてー」

「ー大丈夫だつてーハトがさっさと駆除してくれるっしょ。それにー」

「でも…食べられるんだよ！怖いじゃん！ー私どうしょく、夜道歩いて後ろからガブツとか。ヤダなく。最悪じゃんww」

その後もしばらく別の話題を話していた男女だったが、その話もまとまったようで、軽薄そうな男女にその場からいなくなった。

その場に残されたのは驚愕と疑問の狭間に揺れる一頭のゴリラであつた。

彼の頭に浮かんだのは三つ、グールつまり喰種、ハトつまりCCG、そして東京の凶相であつた。自分の置かれた状況ははつきり言つてなんの憂いもない。しかし、彼、その人の持つ人間性は必ずしもその未来をなんの関係もないナニカとして享受することを良しとはしていなかつた。

東京喰種

読んだことはあるが。

なんとも、狂気渦巻くトコロに来てしまったようである。

しかし、これは私の嫌う理不尽への反駁となるやもしれない。

本来彼を感じるはずのない、ゴリラの感じることのないぎんこくな闘争への気力が緩々と湧き上がってきていた。

学名 GODZILLA || gorilla || gorilla

「これは…いやしかし、私の知るゴリラではない…いや、だが…確かにゴリラでないわけではない、のか？」

その日、功善はVから課せられた仕事を消化して、ようやくと得た休暇にも関わらず、最近東京をゆる〜く騒がせているアル存在について頭の容量の大半を割いていた。

「はあ、何故こうなったのやら…」

昨日、いつも通りに務めを果たし僅かな達成感と、日々内に秘めている己の存在に対する苦悩に揺らいでいた私は、目に痛い色付けがされた一枚のパンフレットに目が縫い付けられた。

古く、廃れた外観とは裏腹に、長蛇の列が連日できることで最近話題となっていることは小耳に挟んでいたが、ここ最近からは何駅も離れているはずのソコのパンフレットは、もう一枚しかなかった。

いつもなら見向きもしない動物園のパンフレット。

何も考えずに明日の休暇を過ごすのであればうってつけかもしれない。

そんな気持ちで、その派手なパンフレットを喪服のように黒いコートの懐におさめ、その場を後にした。

後にわかることだが、この時の何気ない私の決断がこうも後になって大きな波乱を起こしていくとは、この頃の私は露ほどにも思っていなかった。

極端に物の少ない自室の椅子に腰掛けパンフレットを開いた。

当動物園のイチオシ!!?

”学名 GODZILLA || gorilla || gorilla”

「ッ？？？？？」

「…ウアエ？…おっとと、自分でも理解不能な言葉が出てしまった。」

私は、生まれてこの方動物園というところには行ったことがない。

しかし、ゴリラ、gorillaという黒くて大きな猿がいるということくらいは知っている。

争いや、血生臭い足跡しかまだ残せてはいなくとも、その程度ならばヒトに紛れるためにした努力の過程で知ることができる。

しかし、こんな動物？は初めて聞いたし、知った。全くもってわからない。

流石にこの理解不能で、さらに言えば摩訶不思議な内容は言われもない興味に私を掻き立てるのに十分だった。

柄にも無く、半ば飾り物と化していた。パソコンを開いて探し物をした。

情報はすぐさま集まったが、どれもこれも眉唾物だった。

曰く、文字を書いて自分の学名を提示した

曰く、絵を描いた

曰く、ギネスを堂々塗り替える3.6mの巨体

曰く、テレビ企画の取材で同じ展示室のゴリラを軽々担いでみせた

曰く、人間の言葉がわかる

曰く、猛獣用の握力計を破壊した

曰く、頗る綺麗好きで日に三度の沐浴と歯磨きもする

曰く、展示窓越しに子供とジャンケンをしていた、そして負けた

曰く、曰く、曰く、いわく、イワク……

信じがたい事ばかりだが、様々なサイトに載っていたゴリラを持ち上げる姿の動画や、なんらかの意思があるかのように、ウホウホとハッキリとした、そう正に人間のような発音で、滑稽に胸を叩いて回り周囲のゴリラにハブられる姿の動画など。

調べていくうちに、いつの間にか驚愕から、もはやクスリと笑ってしまうようなその、ゴリラ？の姿に和んでいる自分がいた。

「くくっ、明日は休みだったはずだ。たまには変わったものでも見てみるのも悪くないだろう。」

……小さくとはいえ、笑ったのはいつぶりだろう。

明日、この動物園に行ってみよう。行けば何か、そう、ナニカがわかるきがする。代わり映えのない、いや、自らが今無理やりにも変

えようとしている現実にも、こんな何者とも違う、変わった存在があるのだ。

”唯の”の存在があるのだ。

”江田島動物園案内パンフレット”（激派手色使い）

江田島動物園

園長

江田島平七郎（某学園長の子孫…らしい。小説内最強。出番は無い）

立地

21区と20区の境目付近、駅から徒歩10分。

入場料

子供 500えん

大人 600えん

開園 09:00

閉園 18:00

当動物園のイチオシ!!?

文明的なゴリラ!?!?新種!?!?

学名 GODZILLA gorilla gorilla

おおきさ 285センチ（現在進行形で成長中）

おもさ 500キロ（もつと増えるよ）

ちやくむポイント!!?!

・キレイ好き!

1日に3回も沐浴するよ。歯磨きも指で、竹があればその葉で磨くよ。

ついでに言うと、手洗いうがいも毎食前に行うよ!

・アタマが良い!

文字を書いてオハナシできるよ!

・チカラもち!

ルームメイトの大人ゴリラ（140〜210kg）を片手で持ち上げるよ!

・イケメン!

でもゴリラだよ!そう!ゴリラだよ!（真顔）

・グルメだよ!

明らかに果物や竹をより新鮮なものを狙って食べてるみたいだよ！
—————当動物園へぜひご来園ください—————

”裏”設定（オリ主ゴリラについて）

オリ主君、コンプレックスに思い悩む普通の人間のヒト。

好きなものは、穏やかな日常。平凡な毎日に感謝してから眠っているらしい。

ゴリラになっても変わったものは外見と主食のみ。

人間として基本的に何か特別な部分はない。

余りにも色々圧倒的なのでゴリラ的には全くの新種扱い。

元々は西ローランドゴリラと思われていたが入園即座に成長が超加速、ゴリラ年齢は6歳。

明らかに精神と体が不釣り合いに聞こえるが、むしろ中身が負けるレベルでゴリラ度の高いゴリラ。

補足・奇跡のゴリラ、現代のキングコング、ゴリラ圧倒的ゴリラ、地上最強のゴリラなど、ネット上での二つ名は多いが、他を圧倒して支持されているのは、意識の覚醒二日目の失態による、変態ハブられゴリラ、もしくはボツチゴリラニキの二択らしい：な”ん”

て”!!?（迫真）とは本人の談。

ゴリラ以外の生物、人間から見ても絶対的勝ち組に見えるレベルのイケメンゴリラであるが、人間から見てもイケメンな異常なゴリラであるために、逆にゴリラから恐れられている。女が寄りつかねえイケメンゴリラ。

野性味溢れるイケメン。言ってしまうえば、本当にゴリラのまんまなのだが、不思議な魅力がある（顔面偏差値は初めから0以下のゴリラスタートである無念）

単純なイメージ：

- ・三毛別のヒグマよりデカイ。ブルックよりもデカイ。
- ・トランプは千切れる。（刃牙を読んだことがある人だとわかるか

も)

・イケメンゴリラ。うん。イケメン。

間違いない宇宙一最強のイケメンゴリラ。

・世界観的には、まあ喰種ですし、皆さん細身ですし、明らかに体重軽いですし、筋肉密度がおかしいのでね。(褒め言葉)

筋肉質量爆弾ことゴリラの腕力に目に物見せられるわけですよ、ええ。

・筋力の目安(*初期値)「kg」

ベンチプレス：2000kg

スクワッド：2300kg

デッドリフト：2500kg

うわあ、こいつはヒドイ。ビスケットオリバも真っ青ですね。

まあ、ゴリラだからね。しょうがないね。

花山薫<<<ゴリラ くらいかな？

野性味溢れる範馬勇次郎プラスアルファくらいですね。

今のところは。戦闘とかコンクリートIIプリンの扱いなんですね。筋肉もりもりにしなきゃ(使命感)。あんなに都心ボロカスにするのワンパンマンとか東京喰種くらいでは？いや、もつとあるか。うわあ、東京かあいそ涙。

そろそろ、ゴリラ：男の名前を決定しようと思います。

命名 齧 理 羅…ごりら

決定!!?ままま、その内二つ的な何かをつけられるであろうゴリラ氏ですが。ちなみに人間の時の名前は、フレッド。理由は筆者の好きなアーティストの名前に由来している。あくまで本名は各人にお任せ。

ちなみに超純日本人。

ミソ?ツケモノ?大好きさ!ハハッ!(謎のネズミ)

ゴリラのラリゴ

ふむ。どうやら、やらかしたらしい。

フレッドだったころ、人間のヒトだった頃を思い出していた時。ついつい、退屈に耐えかねて文字を木の枝で砂場に書いていたのだが、その姿をバツツチリ録画されていたらしい。

やつつぶべえええ!? エエアー!

ゴリラが、文字を書いた。何にも違和感がないように見えるかもしれない、だかしかし、書いたのはゴリラである。

しかも、とびきりデカくて、日常的に周りとは行動の異なる、そんなゴリラである。衆目はさぞかし奇異の目で私を包むだろう。

変わり者はいつの時代も肩身が狭いのだ。もとより私の寢床には天井もないものだから、ゴリラ身とでも言えようか。

まあそんなことはどうでもいいのだ。

私が怖いのは、解剖されたり、剥製にされたり、ましてヤクローンを作られたりと言ったものである。

たしかに、他の並ゴリラが3センチしかエレクチオンしない下に関しても、私は圧倒的に勝利宣言を示す、そう We are the champions と。

勝者は私一人だが。誰に見せてもいないが。

何が言いたいかというと、交尾などしたくないということだ。

すでに周囲のゴリラから避けられまくっているのに、種の保存とかふざけた理由で嫌がっているメスゴリラと交尾させられようものなら、死ぬに死ねない。

どうせゴリラである。

堂々と童貞を完遂してやろう、そう決意を新たにした今日この頃である。

下らないことを考えているうちに周りには人だかりができていた。

スタッフオンリーの向こうから園長がカートを押してきた。見た感じ私とは同格な何か不思議な力を感じる。多分：筋肉だな、間違い

ない。

それにしても調子の良いことである。

いつもは少し元気のなくなってきた竹やら果物やらばかりなのに、今日に限って記念とかいってケーキを持ってきたようだ。

ふん、食べるがな。ふむ、もともと果物はあまり好きじゃなかったんだけどな。

「ゴリオ君は今日もたくさん食べるなあ、ハッハッハッ！さあ、君のおかげで我が園の来園数は過去例を見ない勢いで伸びてるからねっ、今後とも何かあったら頼むよ！…さてさて、じゃそろそろこのホワイトボードに何か書いてみてくれないかな？」

ふむふむ、なるほど、そういうことか。

私を使って金儲けをしようということだな。まあ、こんな物騒な世界だしなあ、ここがどの区かは知らないが毎食もらっている分は働かないといけないだろう。

私は一肌脱いでみることにした。

展示窓の向こう

「なあ、本当にあのゴリラが文字書くと思うか？」

「意外と書けるかもよ？まあ、相当へロへロな文字だろうけどw」

「十分凄いと思うけどな。…それにしてもデカいな、マジモンのキングコングかもしれないねえな。」

ふふふ、相当に疑っているな。

まあいい人間ども、私の文章力と達筆さにおののくがいい！

シャバ！シユ！シユババ！キュキュ！

「オオオオ!!？」

” My name is GODZILLA || gorilla ||
gorilla.”

” 齧 理 羅 ”

ふっふっふっ…まあ、私にかかればこんなもんだらう。

圧倒的かつ、高等な私の漢字力、そして何より理解どころか目にしたこともないだろうローマ字。

クオレは平伏してもいいんじゃないかな？うん、どうぞ。

ほんの日銭稼ぎのような気持ちで行ったこの行動の一連は、当日居合わせた学者らを騒然とさせた。ある意味、公の歴史に彼の足跡が踏み込まれた最初の日となった。

なぜだろう。あの日からひっきりなしに白衣を着た男たちが私の展示区域、寝床にかじりついて私を観察してくる。

狭い世界ではあるが、やっと慣れ始めた私の日常の隅から隅までを覗いているのだ。

流星に怒りが湧くのも致し方ないことだと思うのは私だけだろうか。

動物園の動物が人に見られることは何とも、いわばプライバシーの常習的な侵害なのだということをゴリラになって感じる事ができた。

願わくば、一生知らなくても良いものである。

毎日が実験の日々。

恐ろしい言い方をするとそんな感じである。

ケーキを貰って数日経ってから、色々な機械やら何やらが私に向けられては、白衣の連中は楽しそうに騒いでいた。

食事は豪華になり、肉の絵を描いて見せたら伝わったのか、その日の夕飯は大きな肉であった。

生肉であったのが残念でならない。

言葉の重要性を感じた。

私は喋れることは喋れるのだから、同じ言語でのコミュニケーションをとることも案としては出かけたが、テレビやらのメディアが益々私の周りを騒がせることが目に見えていたので、血生臭さがのこる生肉とともに飲み込んだ。

それに、何というか、人の持つ興味だとか、そういうものは掻き立てておくことをある程度よしとするものだと思うのだ。

明確な答えを示せるのは人の良いところであり、悪いところだ。

しかし、善悪の隔てを無くしてありのままの概念だけを眺めれば、なんとも立派なものだと言えると私は思う。

其れ、即ち明確さやら、確定やらは人間ならではのものだと思える。人間。

そうだと、人間。

迷い悩んで生きる中で、救いを求めた結果得たものは、そういう断定なのだろう。

しつくりくることは大事だとも。

その重さや厚さはあるだろうが。

何かを白黒つけること、これが人間の最大の発見の一つだと私は思う。

人間が自然だと感じるものというのは、何から何まで決め付けられないもの、ことを言うのだよ。

人間だけだね、明確な答えを出せる：ではなく、出す存在は。

ゴリラになって1週間近くが経った。

驚くほど不自由がないとは面白い。

穏やかな生活であるが、少々の退屈を感じてきた。

周りの並ゴリラは呑気である。

淡々と日々を消費してきた、もしくはさせられてきたのだから当然だが。

彼らは、働かず、よく食べ、よく眠り、よく遊ぶ。

コレがヒトの幸せのカタチと言うのだから面白い。

人間はどこまで行っても、帰る場所は動物的本能なのだ感慨に耽る。

穏やかな日々には不満はない。

単に、タダの動物の私、タダのゴリラの私、そんな些細な事実が許せなくなっただけだ。

本当は違うんだ。

変わるのに、ほんの少しも違うのに。

言葉を飲み込み、自分の表し方を模索し始めた。

私は、タダのゴリラではないのだよ。

そんな気持ち胸を急かすのだ。

騒がしい白衣の連中は増えるばかり。

観客とマスコミも逸る気持ちを押さえ込んで並んでいるのが、離れていても分かった。

最初に始めたのは沐浴と歯磨きと手洗い。

そろそろ不清潔：良く言えば野生的な自分の身嗜みを整えたかったのでちようど良かった。

周りの連中は唐突な私の行動に騒いでいた。

新人類だのなんだのとのたまっている。

正真正銘私はゴリラだよ。

次に実践したのは食べ物の選別や、食べ方を人間っぽくした。

いや、元々に戻したただけだとは思うが。

何が正しいのか、ゴリラの自分に不満がなかった私には少しわからなくなってきた。

さほど驚くものではなかったようだ。

やはり文字という文明の母を使いこなすインパクトが強過ぎたみたいだ。

前回の教訓を生かして、次にしたのは文字を使つての積極的会話だった。

うまくいったのは言うまでもない。

テレビにでたい、企画を立ててくれ。

そんなことをあらかじめ渡されていたボードに書いて渡した。

ケーキを貰った日以来一切のコミュニケーションを絶つてきた私からのアプローチは周囲に思いの外好意的に受け取られたらしい。

企画に沿って、大物コメディアン、流行りの俳優、新人芸人なんかを相手に、色々と文字で答弁してみたり。

猛獣体力テストと題されて、人間のダンベルやらバーベルをパカパカ持ち上げて見せたり。

怪力アニマルとかいう企画では電車を押させられた。

引っ張りだことは聞こえはいいが、野菜と果物でギヤラの賄える、便利なピン芸人のようなものであった。

自分のもつ人間としての感性が、周囲の人間から向けられる、私を人間的仕草をする程度の動物だ、と決め付けられる偏見に傷つけられていることに、私は気付かぬふりをした。

話題にもなった。

人気にもなった。

有名にもなった。

しかし私は、ゴリラである。

ついで誰も、それこそ学者であっても、私を、”唯”の私を認めてくれる者は居なかった。

私はどうやら”タダ”の動物らしい。

拭えぬ失望の一方で、燻っていたモノがザワザワと心の内を駆け抜けた。

この世界への反駁を思い出したのだ。

この世界の行末を思い出したのだ。

東京の狂騒を。

なにより、社会の排斥と理不尽の代償を穏やかな収束に見せかけた、其の結末を。

ナチスユダヤ的な収束は、私が最も嫌うものの一つである。

人間はヒトを喰うことをグールに許さなかった。

何故なら、ヒトもグールも人間だから。

姿の同一性が彼らに食と生の闘争を呼びこんだのだ。

人間はもはやヒトの手からも、グールの手からも滑り落ち、社会となつて両者を蝕み続けていくのだろう。

私は”齧理羅”、”唯”の正義の執行者である。

有り体に言えば、気に食わないからぶち壊すのだ。

この世界の理不尽と悲劇を破壊せしめんとする”唯”のゴリラである。

ゴリラとミミズク

「来てしまったな。」

パンフレットに載っていたゴリラを一目見ようと何駅か跨いだ。

まさか私がゴリラを見るのに貴重な休暇を使ったと聞いたら、上司の芥子はどんな顔をするのだろうか。

さぞかし愉快だろう。

好きでもない上司を頭の中で一人で弄ることなど、初めてかもしれない。

私は自分の今の有様をくだらないとは思っていても、人生初の、正に未知との遭遇を心待ちにしてならなかった、

何かを変えてくれる。

そんな淡い希望にも似た残酷さを背負っていることに、誰しも気づきたくはないのだ。

何も生まない、何も絶やさない、そんな不格好な思考を止めないことが、それまで人間に打ち捨てられてきた私の抱く無邪気さへの、私なりの敬意だった。

私は楽しみを感じていることを、素直には認められない生き方を歩んできたから。

20区よりの最寄り駅からさほど離れてもいない所に空き物件を見つけた。

なんだか私は自分に糸が掛かったような気がした。

灯が入っていないココにどこか惹かれた。

どこをとつても全く不愉快はなく、また来ようと脚を進めた。

人の列が手元のパンフに掲載されたものよりだいぶ長い。

目の前の犄きから発される熱気が初夏の心地よい風を妨げているようで不快だった。

人混みは好都合だか、長時間目の前に肉を垂らされる犬になったように、あまり気が乗らなかった。

近くの喫茶店でコーヒーを頼んだ。

三時間ほど粘ると人波は空いたようで、まばらに親子や老夫婦が並

ぶのみとなった。

目的は同じだろうに。

と、列に加わり能天気なヒトの様子に嫉妬と呆れを覚えた。

思いの外空くのは早く10分もすれば視界が開けた。

前に並んでいた親子連れが順繰り見て回る中。

キリンもゾウもライオンも飛び越して、私は一直線にソコへ向かった。

その日、目当てのものが見つかることはなかった。

私の知るゴリラは、あんなに毛が薄くない。

背は高いかもしれないが、鼻も高い。

黒い毛はあるが、頭だけだ。

仕草は人間？

私の目の前には、背の高い裸の大男が立っていた。

全く以て衝撃を禁じ得ない。

思考は停止し、私は戸惑った。

気づけば、戸惑いのあまり何時も自分が人間に話しかけるようにソレに話しかけていた。

「何故、なぜ…服を着ていない…。」

「お前は何なんだ？」

「ゴリラは何処にいる。」

「…このパンフレットに載っているゴリラはどこにいるんだ？…教え
てくれ！」

周囲の視線に気づき、周りを見回した。

自分が大きな声を出してしまったのは理解できる。

しかし、衆目は奇異なものを見る目で私のことを見つめているの
だ。

まるで、全くわからないと言った具合に。

初めて何かを失った時のように。

ただ不思議そうに。

黒髪黒目の大男は、周囲の異変と私を見比べると、暫しの逡巡のの

ち口を開いた。

「俺は”唯の”ゴリラだぜ、Vの功善」
衝撃と理解不能の現実が私を貫いた。

「俺をここから連れ出してくれ。」

私は、せつかくの休暇を浪費してしまったことに失意を感じていた。

私の求める変化は無かったな、と。

そして、するべきこともわかった、このよくわからない存在を消す事だと。

この男は何かを知っている。

そのことが利益になるか不利益になるかはわからないが、今の私に強烈な未知は荷が重かった。

ヒトの寝静まる夜に向けて、その場から踵を返した。

夜が来るまで私は口を一度も開かなかった。

夜の帳が等しく東京を包んだころ。

功善は死を確信していた。

声は震え、何よりも信をおいていた自分の赫子

だ っ た も の

を目を見開いて見つめるほかなかった。

10分前

天井を破り、ゴリラから離れて一人裸で眠る大男に向かって

「命を貰いに来た…大人しく死ね。」

功善は一切の油断なく自分の赫子に全身神経を集中させ、全力で叩

きつけた。

大男は動かない。

正に目前といったところで大男はその大きく分厚い掌で、正にゴリ凛々しさを体現した逞しきでソレを引き掴んだ。

わざわざ目の数ミリさえも引き寄せて左右で握ると、大男の全身の筋肉が躍動し、目に見えて強靱な功善の赫子を捻りながら引き伸ばし始めたのだ。

グムンツ

圧の強さに赫子の方が耐えかねて、大男の指先は沈み込んだ。

ググククク：ニギイキキキキイ：

徐々に筋肉ともわからない繊維が悲鳴を上げ始めた

ミキイア：きいいややああい

硬質なものがゆつくりと引き延ばされ、

キチキチチニキイツ

筋張った肉塊を無理やり裂くような音が響いたかと思うと

ツばっん！

その勢いのままに引き千切られた

片手にグロテスクに無理やり千切られた功善の赫子の残骸をぶら下げて大男はのそりと起き上がった。

そして、昼間と同じく男は功善にハッキリ言い放った。

「俺をここから連れ出してくれ。」

体を再生する余裕はあった。

しかし、未だ底知れぬ圧倒的武力の前に功善は自らの死を悟ったが、男の求めた代償は変容だった。

「…わかった」

力ない返事を返すだけだったが、彼の瞳はどこか澄んでいるように見えた。

弛まぬ齧理羅

「なぜ…何故服を着ていない…」

正面の展示窓の向こうから足早にこちらへ向かってきた男には見覚えがあつた。

…ニチャのどこにいた奴では？

割と重要人物では？（バリバリ主要人物なんだよなあ）

コンタクトを取るべきでは？

私はしばしの逡巡よりも先に、その男、功善に立ち塞がるように仁王立ちで構えていた。

が、どうやら彼は私のことをよく理解できていない様子である。

ゴリラがなんだとか、人間では？とかブツブツ言っている。

…：こいつ、こんなキャラだっけ？

まあ、いい。

私の目下の目的は、この動物園からの脱出だ。

なによりも、もう一つはつきりとしたことがある。

ここの功善はどうにも若い、ピチピチJKメスゴリラ程ではないが。

…：ゴリラよりは若く見える。

私の感覚がどうやらゴリラに毒されているようだ、早いところ原作の美女（人間）との遭遇を願うしかない。

それにしても、語りかけるべきか。

手元にカンペもとい文字を書くボードを用意しつつ考える。

おそらく、相当のパンチが必要だというのは確かである、試しに気障ったらしくいこう、そうしよう。

舐められちゃあ敵わんからなあニチャなんつってな。

「俺はゴリラだぜ、Vの功善」

え、えええ。

なんつにも喋らなくなったぞ。

思いの外自分の心情をミュートするタイプなのか？

なんか、もつと、ダイナミック敵ムーブをまだかまして来るくらい若いと思っていたんだが。

ま、いいか！（楽観視点）

ついでにここから出してくれて言っておこう。

頼むヨオ、一回！一回だから！ネ！ネ！

…ダメみたいですね。

アイツ…無視どころかなんの反応も見せずに帰っていきやがりましたよ。

流石に怒ってしまうな、このゴリラに対して人間だとか何とか言ってるけど、お前はそもそもグールだろがいつ！

粛々と刑期を消化する極道レベルで、この齧理羅の方が真つ当な生き方に違いない。

…：…なんだか熱くなってしまったが、少なくとも収穫はあった。

今夜にでも殺されそうにも感じるが…俺はゴリラだし、大丈夫だろう

（ドヤア）

お？今日のランチ（餌）はステーキか！

よしよし、何よりだぞ、生だということを除いてな！

ググウウウウウウ…

グウ…

ゴガあー…

ウツツツルサイ。

イビキがここまで酷いとは、ルームメイトとしてお前たち並ゴリラに対して殺意が湧くぞ、湧くだけで何にもする気はないがな！

はあー、眠れない。

今後について考えるか。

まずは、動物園からの脱出、ここは客の話し声から聞く分には1区ではない、何駅も乗り継いで1区に来たとか何とか聞いてたしな。

次にすべきなのは、功善がまだ若いから…エトのことだな、後は

しかも、なんだかわからんが、必死の形相で力んでいらつしやる！
：俺の方が力だけなら強いということ…か？

くおれは、コレは…面白い。

もはやグール恐るるに足らずウウウ！

ゴリラの前には無力ということか！

そういうことなら、ツワモノムーブしてもいい頃合いというわけか

…

俺の命を狙ったんだ、お前の赫子で俺の全力を試させて貰うぞ！

え。え。

思いの外軽く引き千切れてしまったのだが…

ザコ設定とかじゃあ、ないよなあ…

ま、いつか！（楽観主義）

私はゴリラだしね！

それではでは、そろそろここから連れ出してもらいましようかね！

これまでありがとうとよ園長！ありがとう、ルームメイトの並ゴリラ！

あと、嘉納とかいう、俺にパンツを寄越してきた白衣の男！

は かな かつ た け ど !!

私はゴリラだからな！

VはV a n a n a のV

「お前は一体何なのだ、何が目的だ？」

グールに襲われた可哀想なゴリラということにするために、私の寢床を程よく功善に荒らしてもらっていると、落ち着いてきたのか、そんなことを話しかけられた。

まあ、隠すものでも無いし教えてやることにする。

無論、直近の問題だが。

「まずは、社会的基盤を作りこの東京で暮らすことだな。」

「ふむ、そうか。」

「お前は…私の何を知っている？」

ほんの少し前まで私によって青息吐息だったというのに、グールと
いうのは思ったよりもお元気さんなのかも知れない。

「Vに所属する功善という男喰種、これぐらいだな。」

「…どこで、とは聞かないでおこう。」

「もう一ついいだろうか？」

「構わない、私は寛大なゴリラ故。」

「それだ…、そのゴリラというのはなんなのだ？」

??私はゴリラじゃないか。

まさかッ！コイツはゴリラを知らないのか!?!?

な、何なのだその明らかなる、常識の欠如!

グール達の教養的な問題は思いの外根深く、かつ残酷だということ
か…

この時のゴリラの勘違いがのちにグール全体に大きな影響を及ぼ
すのはまた別のハナシ。

「お前はゴリラを知らないのか？」

「知っている。だが、お前は どう見ても…明らかに人間ではないか！」

「お前の姿は確かに厳ついかもしれん、しかし…うむ、むしろ並の偉
丈夫以上に整った容姿があるように見えるのだが？」

「お前こそ、自分の容姿を自ら見たことがないのではないか？」
「あと服を着てくれ…」

え。え。(2度目)

「俺がつ、ゴリラじゃ無くて人間!?!?」

「しかも、偉丈夫!?!?」

人間だった時も言われたことないぞ…なんだなんだ、ややこしくなってきたな。

こいつからは俺が人間、しかもとびきりの偉丈夫に見えると。

だが、俺は何度展示窓の反射に写る自分を鑑みても、ゴリラにしか見えなかったぞ。

百歩譲って黒い巨躯の大男だし、断じて偉丈夫ではない。

コイツ…俺を騙そうというのか？

偉丈夫(笑) ってか？オ？

なんだあ、てめえ(ドツポキレる)

なあるほど、ほうほうほう。

そうきましたか。

勝てないからと、精神的に潰してしまおうと？

ガラスのハートは認めるが、ゴリラの心を砕きたいんだったらロードローラーでも持つてくるんだっただな!!?

まあいい、君のそれに乗ってやろうじゃあないか。

ん？そういえば…どうして普通に意思疎通できてるんだ？

いやいやいや、待てよ待てよ！今までを思い出してみろ俺！
功善と話してた時！

だつ、誰も俺たちに対して驚くそぶりも何にもなかったな…

なぜ？目の前のコイツは俺としっかり会話してるってのに？

な、なんでなんだよオ！おかしい！オカシイ！可笑しい！

…そういえば、あの白衣の男もずいぶん人間に接するみたいな仕草

が多かったな：

文明の力をやたらと使わせようとしたり、人間の服を着せようとして躍起になったり。

：最後まで俺の身体を真っ直ぐ見てなかったな：ゴリラに恥じら
いと恐れ入ったよ笑、とか言ってる場合じゃない事実が浮上しち
まった。

俺や、ほとんどの他の人間は俺のことを人間だと認識できない。

だが、何かしらの条件が揃った奴には俺が人間に見えてしまう、と
いう事実がな。

俺はゴリラだが、どうやらヒトやぐーるを選ぶ人間らしい。

VはVananaのV：2

「お、お、おれは…俺、は…クウウツ…：功善、私は…私は、齧理羅だ。」
「ふん、まあ今はいい。」

「ああ、だが、私はゴリラではない、人間たるゴリラの 齧理羅 だ。」
悩んだが答えというものはそうそう難解なものではないと、そう考
えるべきだろう。

ちっぽけ：まあ凶体は大きいが、そんな一ゴリラの苦悩など。

大切、元より何かを支えるものというのは、自分のあり方を自分で
決める勇気だろう。

自分の決断や行動を正しいと認める、自分の存在を最初に認める者
は自分その人なのだから。

なんだかんだ言いながら、私は自分を人間だとは認識できなかつ
た。

それが答えとしては適当だろう。

悩まないことは不可能である。

哲学とは芸術や科学以上に、ただ思考を磨くそういうものなのだ
と思う。

自分を認める、良くも悪くも、今私の掌に有る物はそう多くない。

強いていうならば、先ほど千切りとった赫子の肉片の、昼飯のス
テーキの肉片：肉片しかないな。

まあ、あとは自分の身一つ、裸一貫のゴリラの戯言である。

人間は断定の執行を自分の手から抜け落ちることのない、完全な権
利か何かだと勘違いすることもあるだろう。

しかし、人間とは社会であり、これらを生み出したヒト、今は加え
てグルルたちの、手のひらからすでに摘まれているモノと言つてもい
いだろう。

ヒトやグルルが社会の残酷に身を打ち払わせるのは、誰かはナニか
の限られたものたちの意思や意志などにはよらず、ただ”唯”社会を
もとい人間を、我々が野放しにしてしまったというだけなのだ。

二人以上の人間によって行われる何かは、もはや誰の何も介在しな

V a n a n a a f f a i r

ムグムグムグ…ゴクンツ!

ニチャ ニチャ

ガツガツツ! マグムグ…

ニチャ ニチャ

「…それで、功善。ニチャお前から話があると出向いてみれば、なんなんだこの お と こ は?」

私が焼いてもらった4ポンドの赤身肉（何の肉かはわからん）のス
テーキを食べていると、芥子がしびれをきらしたらしい。

激しくニチャニチャしていて、すこぶる気持ち悪い。

退場して、どうぞ。

それはそうと、ゴリラになつてはじめて塩胡椒を味わった。

これは何とも、やはり野生味だけでは文明ゴリラの舌には合わな
かったようだ。

とにかく美味! それに限る。

筋肉だろうとなんだろうと関係なく食べ進められるこの体には感
謝である。

ちなみに、ナイフとフォークを貰えなかった為に刃牙のピクル状態
である。

ジャックハンマーのナポを再現したかったのに、無念。

「これが、例の齧理羅だ。」

「ふっふふふ、お前も冗談を言うようになったかと思えば、ニチャ随分
ひどいな。お前はユーモアがRc細胞に置き換わっているのか? ニ
チャふ、ははは…」

「私は、事実しか言わん。」

「…だとしてもだ、どうしてこの男をここに? ニチャなんだ? さては
殺せとでも? ニチャ まあ、すでに組織への干渉は度を越しているか
らな、すでに死は確定しているだろうが…オイ、ゴリラ男…それは最
後の晚餐かね? ニチャ」

ミチミチ、フヂツ！

ガツガツ…モグム、ゴクン!!

「朝飯前だが？（普通に事実）」

「貴様…ふざけているのか？ニチャ」

「おい、芥子。この男は確実に戦力になる。私も歯が立たなかった。事実そいつの掌から先ほど採取した赫子の肉片は確かに私のものだったろう。」

「…まあな、晩飯後だったよ。目を瞑って考え事してたらいきなり殺されかけたんだ。赫子の一つや二つ、捻じ切ってしまったても仕方ないだろう。」

「…む、チツ。その話が事実だとして、このゴリラ男が我々の指示にしたがう確証はあるのか？ニチャ 要らぬ禍根をのちに残すようならば此処で消すべきではないか？」ニチャニチャ

ニチャ男のキモさに戦々恐々としていると、功善がはつきりと言った。

「CCGの戦力として、特注のスーツを身に纏わせて喰種の矢面に立たせればいい。まだまだ、あそこは戦力が未充足だからな。」

「まあ、殺さないというのなら利用するまでだからな。お前がそこまで推す理由は不可解だが、ニチャ良しとしよう。お前はこれから捨て駒、盾、なんでもしてもらおうからな。ニチャ」

「まあ、社会的ゴリラの仲間入りとでも考えればいいか？…そうだ、家をくれ、廃マンションでも良いから何処か土地をくれ。どんな危険地帯でも構わん。」

「ほう、殊勝な心掛けだな、ニチャでは新居祝いとして早速今から働いてもらおう。ニチャ」

私に課せられた最初の労働は20区の喰種の完全なる掃討であった。

思いの外私の力へ大きな期待がかかっていることに対して頬が緩んだのはいうまでもない。

気を引き締めなければという感情と、どうしようかという感情が浮上し始めているが、案内役もいるらしいので不安は細やかであった。

まさか、CCCGで働くことになるとは思わなかった。

まあ、Vという組織自体は調停者を気取っているような印象を受け
るし、ヒトとグール双方の力の均衡を、今はまだ保っておきたいよう
だ。

この頃の東京はまだまだ荒れていた印象が強いしな、鯨やヤモリ、
ましてやノロイなんていう強力な個体も、まだまだ若く、最盛期かは
知らんが、油断はできないだろう。

外国に行けば、ドイツの名家と中華の赤舌がいるしな。

まだまだ10年以上かかるといふのか、随分と長い道のりだな。
ゴリラの寿命が心配になる今日この頃だな。

美少女に声かけちやう系ゴリラ

「おおおーデカーーーーいー！ヒローーーーいー！」

コンクリートジャングル、昨日は暗くてよく見えなかったが…ビルが犇き、ガラスが眩い都心の朝に田舎もんリアクションをとつてしまふのも無理はない。

柄にも無くはしやぎまくってしまった。さてさて、家をお求めになる為には、20区の喰種の完全掃討を求められているつと。

…完全掃討。

何を基準にするんだ？というか、この区を俺一人で？

いやいやいや、案内人がいるつて言つてたしな、服はもらったから着てみたが、いやはや…何というか新鮮だなあ。

パツツンパツツンなんだもん。

明らかにサイズが…reのオークション編で出てきたおデブピエロの服よりも既に大分大きいはずなんだが、見るからに。

…不満ばかり言つても仕方ないか。

元々全裸だし、ゴリラだもん。

まだまだこの頃はCCGとはいつても出来立てホヤホヤだもんな、デザインもどこか違うのかな？

鳩の着るあの白コートだつて、明らかに俺のはテントかなつて感じだな。

黒い体毛がわからないように完全防備だし、こんなデカブツ世界広しといえども、私くらいだろうなあ、

だけど、けどね。

この頭にかぶせられたヘルムはどうかと思うのですよ。

鉄つぽく黒光りするバケツだな、こりや。

頭のとっぺんは丸く加工してくれたみたいだけど、中世の騎士にしては不格好だし、顔の正面はT字の切れ込みが入ってるけど息苦しいし。

ナンダコレ？

私はキングダムの乱美迫じゃあないんだぜツ!??
全く……んお?

なんじゃ、あの女の子は?

むむむ、どつかで見たことがあるんだよなあ……でも、それにしても、大きさが変わつとらん……私が大きいのか?

いやいや、先ずは話しかけてみるのが重要だ、俺の言葉がわかったんなら、恐らく私の姿は人間に写るんだろうからな。

ヒョロイ見た目の若いお兄さんが相方らしいけど……全く見かけないしな。

先に動かしてもらいますよ。

その日もどこにもなくぶらついていた。

空腹は常だし、生まれた時からそのことは変わらないから半ば受け入れていた。

いざとなれば、殺して喰べるだけだし、野垂れ死ぬなんて真っ平我慢だ。

今日の食事を探していると、全く気づかないうちに目の前が真っ白な壁に変わった……おかしい、道を間違えるはずがない。

「あのか、もし。そこのお嬢さん、良ければ私の捜査にご協力願えませんか?私、こういうものでして。」

頭の遙か上から声が聞こえて、自分じゃないことを願いつつ顔を上げた。

壁だと思っていたのは、3メートルに届くほどの、今まで見たこともない大男だった。

警戒よりも先に困惑した。

明らかに同じ人間の範疇外にいるような、そんな印象を受けたから。

次に男の出した手帳に目が縫い付けられた。

喰種捜査官

そんな単語の羅列を無視して、なんの気ないそぶりを見せることに注力した。

「へえ、そうなんだ。お兄さんも大変だね、悪いけど私これから用事あるんだよね：それで急いでるから違う人をお願いしてくれる？」

少し強めに言い切った。

男はたじろぐこともなく、かと言ってすんなりと通してもくれないように感じ、体の感覚を、生まれもつても自分の武器に集中させ始める。

「そういう事情だとは知らなかった。：申し訳ないけど、私も仕事でね。どうにか協力してくれないかな？食事とかなら：：ほら、奢るし、他にも何かあれば助けになるかもしれない。私と私の上司に貸しを作ると思っさ、ね。」

思いの外足が強くて表情に出さずに驚いた。

はあ、仕方がないか。

どうせ目撃証言とか何とかだろう。

うまくおびき出して始末する方向に思考を切り替えた。

作り笑いを顔に塗して、私は名乗りを上げた。

「ふくん：：そつか。ならあつちで話そつか、私はロマってゆうんだ。おにーさんのお名前は？」

俺の名はゴリフレッド

どうやら捜査にご協力願えるそうだ。

なので場所を移そうとしたら名前を聞かれてしまった。

「私の名前は齧理……フレッドだ。」

危ない危ない、初対面では流石にゴリラなんて名乗れないもんな。そうだよな？

「ん、よろしくね〜ゴリフレッドさーん。」

そつ！そつちも拾われちゃったかく…いいのに、フレッドだけでゴリなんとかって、ゴリアテくらいじゃい。

…まあ、律儀ない子なのかもしれない。

うむ、そう思うことにしよう。

ふう、それにしても腹が減った。

まさか社畜ゴリラだからって、朝の8時に起こされるとはな。

動物園暮らしですつかり早寝早起きが習慣化してしまった。

おかげで急いで朝食も食べられなかった。

奢るとか言っても…買ってきてもらうしかないんだよなあ。

経費自体は貰えるのかなんとか…もつとちゃんと話聞いてくんだった。

「ね、ね、ゴリさん。さつき奢ってくれるって言ったよね。」

「うん、言ったよ。それがどうしたんだい？まあ、協力してくれるなら今すぐでも無理ではないかな。」

「そつか、じゃあ、ゴリさんを食べちゃいま〜すう！」

いつの間にか三方をコンクリートに囲まれていた。

以前とおんなじ状況というわけか！

大振りの赫子が突きを高速で繰り出してきた。

狙いは私の腹だったようで、闇雲に腕を振り回しても前回のようには上手く掴めなかった。

「グッ！ウウウ…」

ここにきてから、初めて苦痛を味わったかもしれない。

私の腹を鋭く無数の触手が貫いたようだ。

「ありやりやく、あつけなかつたね。ゴリさん体がおつきいからもちつと硬いかな?とか思ってたけどそうでもないんだね。」

「まついつか♡大きいぶん食べごたえがありそーだしッ!」

そう言つて彼女は私の体を肉塊に変えようと、赫子の形状変え始めた。

私は自らが貫かれていた今の状況をどこか俯瞰的に眺めていたが、自分の体の潜在能力の可能性を思い出した。

糊のついた新品の特注スーツを突き破り、私の肉体から生えているように見えるソレを、今の全力でもつて握り締めた。

「あれれ、抵抗しちゃうか?楽には死ねないぞオ?」

どこか楽しそうに赫子を唸らせながらロマは私を笑っていた。

ミチツチキイ!!?

瞬間

バパツツパン!

赫子が木っ端微塵に爆ぜ千切れた。

私は己の肉体に宿るよくわからない、兎に角膨大な膂力、胆力に感嘆しつつ、全身に力を込め突貫した。

腹の傷は既に無く、痛みまで消え去っていた。

「えっ!??エッ!??そ、そんなのあり!??はああ!??あ、ウツソお…」

「ッはつやつい!!くんややくっ!」

半ばからちぎれた赫子を巧みに操り、形状の変化を中断して迎撃に注力してきたようだ。

私は武道の経験など僅かばかりしかないので、思い切つて悪質タックルによる質量攻撃を敢行することにした。

双方の衝突まで10センチと言うところ、私は大きく腕を開いた。

「あわぶっ!」

「ぐおおう!」

ダカンっ!ガラガラゴジャリ:

ロマを抱え込むようにして、どちらかという直線上にあったコンクリート壁にタックルをかます結果になった。

私はおでこにクリーンヒットしたが、ロマは私の胸板にはさまれ苦

しむのに留まったようだ。

「な、何すんのさあ！つお前え、いきなり突っ込んできたかと思ったら、胸板押し付けやがって！」

「ふん！私のことを朝食か何かと勘違いしている少女には礼儀を教える必要があるようだな！特に何もしないけど！」

何もしない、そう言いながらもロマの赫子を根本から引きちぎっている辺り、このゴリラ中々に強かである。

あくまでも赫子そのものに焦点を搾ったのは彼女の赫包を傷つけないという一種のしんしてきゴリリズムからくるものであった。

「はあ〜？…お前、捜査官なんだろ？箱も持ってないし？手ぶらでラッキーとか思ってたらとんだ勘違いだったわ。」

なんなんだこいつは？

彼女、帆糸ロマは20年にも満たない人生で最大のピンチを迎えていた。

闘争と享樂、血による快樂だけを頼りに生きてきた彼女にとって、捜査官とは邪魔ではあるが、その程度の雑魚が大半であり。

自分が素手で倒されるほどの小物ではないことを正しく認識していた。

故に、自身の生の謳歌を打ち止めるだけの武力を、グールでもない存在によって身一つで体現されることに確かな恐怖を得た。

それはある意味明確な死のビジョンであり、怯えであり、嫉妬であり、絶望であり、諦めであった。

どれもこれもがこれまでの自分には新鮮に感じてしまい、死を目前にどこか達観した自らに不似合いな自然な穏やかさを笑った。

「殺せば？」

短い言葉だった。

しかしそれは、明確な自分への判決を受け入れる穏やかさと死への怯えという相反する感情を垂れ流していた。

ゆっくりと目を閉じて幕が垂れ墜ちるのを待った。

がしかし、この男はゴリラであった。

食べることは生きること

目を瞑ってしばらく経ったが一向にエンドロールは流れなかった。おかしい：あの捜査官は私を見逃したのか？

そんな僅かな好奇心に負けて目を開けた。すぐ目の前に男の端正な顔が迫っていた。

侮蔑も、軽蔑も、恐怖も、はたまた哀れみもその男は顔に貼り付けていなかった。

ただ、真つ直ぐと自分を見ている。

良し悪しにかかわらず初めての経験に、言葉にならない羞恥心を抱いた。密かに溜まった頬の熱を逃すように、勢いよく顔俯けた。

「ここにあるお金で、ありったけの食べ物を買ってきてくれ。」

間も無く男の声が降ってきたが、彼女には男の意図を理解できなかった。

これは実験だ。

自分の体が明らかに異常な特質をもつことは明らかである。

先程致命傷を負わされたはずの右腹部にはかすり傷一つなく、黒く丈夫な毛が露わになっている。

服はだめだったようだ、無念。

それはさておき、私の体は傷が治りやすいのか？

それとも体の再生速度が異次元のレベルなのか？

それを実験するために必要なもの、それが食べ物と喰種だ。

現在片方が欠けているため、こうして彼女に頼むこととなった。

「はあ、なんでアタシが、食べられない人間の食べ物をわざわざ買わなきゃならんのさ。見張り付きとはいえ、こんだけ離れてるんだから逃げるんじゃないか、とか考えないのかな…」

ゴリフレッドの圧に屈して渋々といった様子で買い物カゴに食べ物を入れていく。

たまに消臭スプレーやら明らかに食べ物ではないものが入ってい

るのはわざとなのか、知らないのか、ゴリラは特に気にすることもなく彼女の買物風景を外から眺めていた。

案外に従順なロマの姿を見て、安堵と期待に身体が温まる思いのゴリラであった。

買物を終えて、レシートまで律儀に渡すあたりは何処か外見相応の愛らしさを感じさせたが、ゴリラは心を鬼にして次の一步を踏み出した。

「俺の腕を嚙ってくれ。」

「…うえ？」

何を考えているんだこいつは？

齧る、歯を立てて肉を食いちぎれ。

そういうことか？

「うん…」

確認のために投げかけた言葉はどこか控えめに肯定された。

状況が理解できていないロマを置いて、ゴリラは経費を着服して買ってきたもらった今日の朝昼のご飯に舌鼓を打ち始めた。

もぐもぐもぐ…

…バナナを買ってきてくれた頼まなくて…ごくん…正解だったな。

バナナオンリーの食卓は流石に勘弁願いたい。

…あ、この子からは人間に見えるのか。

まあ、箸は入ってなかったのね。

案の定野生児スタイルでの食事である。

お惣菜のやきそば、ね、いい趣味してるよ。

ずぞぞっ…ムックムック…

やはり、スーパーマーケットのお惣菜は美味しいのだな。

調理されたもののがたみを感じる。

おっ！なんとなんとアイスクリームじゃないの！

ほんつとに久しぶりだな…ソフトクリームかあ。

上半分（本体）のソフトをプラスチックの蓋を外す時にさらわれないように注意して食べなければ。

カポツ…まあおん。

…ひと口、ね…。

まゴリラだし、つぎつぎ……

一通り食べ終わったのか、ゴリラは満足げである。

「どれどれ、私のランチは終わりましたからね、今度はお嬢さんの番ですよ。」

目の前の男は特に躊躇うそぶりも見せず、その艶やかで色が白く逞しさが弾ける左腕を私の口元に差し出した。

「…本気なのか？…いいんだな？…：変なヤツツ…」

何度も確認をとる自分がバカらしい。

そう思っても、気が引けてしまった。

不可解な現象の矛先が私に向けられるのは怖かった。

確認を更にとるために、目の前の男の顔を見た。

私の目線にまで身を縮こませた男の顔は真剣そのもので、瞳は私が今までの人生で感じてきた苦悩や、苦痛を見透かしているように澄んでいた。

腕を差し出す仕草は、子犬にミルクをやる飼い主のように穏やかであつた。

私への否定の情の一切がそこに介在することはなかった。
信じてみようと思った。

端的に言えばそう感じたに限る。

命を奪つては、それを貪り自身の命を繋いだ。

私を哀れむものもなく、私に対する負の感情だけが鼻をついた。
肉を食む私の顔はいつも何処か苦しそうに歪んでいた。
奪つてしか来なかつたから。

グッ

ミチ：

ギチ：

ブチ：

ムグ…ムグ…

コク：ン

初めて与えられた糧は私に穏やかな命の甘みを覚えさせた。
私は穏やかな顔の自分を今に見た。

生きることは食べることである。

そこに貴賤はなく、皆一様に命をつなぐためにただ泥臭い。

草木の青い匂いに同じく、生きることは当然の在り方である。

食と生を肯定することがさいだいの自己肯定であることを忘れてはいけない。

ゴリラのカラダ

「…どうだ？」

「…」

指令！第一使徒ロマ沈黙！沈黙しました！

…おふぎはここまでにして、なんとというか穏やかな顔になったか

？

？どうしたのか？私の肉は変なものでも混ざっていたのだろうか

？

…ツととと、いててて。

集中し過ぎて、冷静になったら腕が痛いことに気づいた。

目を向けると、すでに出血はなく、わずかに肉の胎動を感じるのみであった。

それから間も無くして、歯形が濃く残っていることを除けばいつものたくましい腕に戻っていた。

歯形は残るのな…。

…それにしても、おかしなカラダである。

本来であれば痛はずなのだ、それも泣き叫ぶくらいに。

なのに、さほど、うん、痛い…この程度でいいのか？

私の痛覚神経が壊れたことも疑わしい。

しかし、問題はコノカラダの回復力はどれほどなのか？ということである。

グールがヒトを食べることは、ヒトがウシやブタを食べると変わらない。

なのにその本来のあり方がグールにのみ不都合な形で歪められているから、同じ人間なのにヒトとグールは苦悩を続けてきたのだ。

もしかしたら、だ。

私はグールが食べられる”唯”一頭のゴリラなのかもしれない。

私が思うこと、それはヒトの肉と他の食物の成分を徹底的に調べ上げることで、何が作用してグールはヒトの肉以外を食として受け付け

ないのかを明確化し、その差を補うこと。

わざわざヒトの肉を食わなくても、ヒトの食べ物の足りない部分を補う形で、ヒトとグールが同じ食卓を囲むことが出来れば、これ以上の理想はないだろう。

私に言わせれば、戦時体制において最強の矛となりうるのは他ならぬグールである。

国防の観点からみても、グールの排斥は人間にとって反利益主義と言える。

何より、ナチスユダヤ的解決は最も忌み嫌うべきである。

絶やされそうになってからでは遅いのだ、ここにおける最大の傲慢は大多数の第三者による被害の当事者の心情を無視し、ネコババ的に合理的解決と社会機構にカタを当て嵌め、あまつさえ当事者をそこに押し込める事である。

私は人間たるゴリラである。

だが、ヒトでもグールでもない。

私はナチスユダヤ的結末を壊すためにこれらの合理的解決、社会機構を破壊するつもりである。

そのためのコノカラダと言う力だと思おうのである。

私は恍惚とした表情を浮かべていたロマの頬を緩く叩いた。

「ツふあ…あ、か、齧ったけど？」

「うん、どうだった？感想を聞かせてくれ。」

「感想って…いってもね、…ん…おいし、かったよ…」

「そうか、それは何よりだ。私はグールでも食べられる肉を持ち、食まれても尽きないカラダを授けられたみたいだな。」

「な、確かに…グールでもないのに、もう齧り付いた傷が無くなって…歯形は残っちゃったんだ…」

「まあ気にすることはない。本当はこの完全掃討のために送られたんだけど、相方も来なかつたしな。これも何かの縁だ、ついでに今夜の夜露を凌ぐための住処探しを手伝ってくれないか？」

今日会ったばかりなのに寝床まで求めるのはいささか図々し過ぎたかな？

少し罪悪感を感じていると、彼女は最初にあつた時に比べてどこか自然な笑みで私に答えた。

「いいよーふふっ、案内してあげるよー。」

よくは知らんがご機嫌そうで何よりだ。

青空には太陽がもう真上から地上に光を届けていた。

朝っぱらから忙しい1日だったが、私の足取りは軽い。

私は美味しいゴリラだったようだ。

その頃相方は…

「はっ はっ はっ はっ!!」

タカカタカタカタッ! (革靴の足音)

ゴリフレッド捜査官がロマとゴリラ肉の実験をしている時!

同時刻、真戸呉緒捜査官は今月最高に焦っていた!

「しまった、しまった、しまったッ!」

ゴリラとの待ち合わせ場所について、よく聞いていなかったゴリラが勘違いしたにもかかわらず。

彼、真戸呉緒青年は自分のミスかもしれないと探してくれていたのだ。

そんな最中、唐突に周囲に響くコンクリートの破碎音!

彼の頭の中に浮上したのは最悪の可能性であった。

相方と初日にして死別!しかも面識ゼロ!

正に永遠のゼロを一つ人生に刻んでしまうかもしれないということもあり、彼は必死であった。

痩せ気味の見た目に反して、対喰種用の武器であるクインケの扱いはすでに目を見張るものがある彼が、今まさに目を見開いてヤツを探しているのである、かわいそうにな!

彼の人生最高の走りの一つに今後数えられるであろうこのダッシュは、虚しくも人の気配を吐き出しきった戦闘の足跡に辿り着いたところで停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ、フ、ふ、フレツツツツドクローローーん!!!」

彼の絶叫は目の前のコンクリートに多量の血液の染みを残して姿を消してしまった、相方フレッド仮二等捜査官(身元など、不明確な点が多く今後の功績に依るが、順調な出世は難しい)に捧げられた。

「へっぷしー…誰かが私について噂しているらしい…そういえばまだ相方の顔すら見ていないなあ、これで良いのか全く…新人の教育がなっとりませんな和修局長くニチャってか! H A H A H A!!」

「相方さんに会いにくっていう選択肢は無いのね…あはは…」
悲しいかな！彼、即ちこのゴリラに一切の悪気はないのであるう。

「ここかい？ほお、初めて見たぞ廃マンション。ココは比較的綺麗なんだな。おつ、扉もしつかりしてるな。それに、天井もそこまで低くないし。いいな、ワクワクするぞ。」

「…さつきからの話を聞く限りだと、ゴリさんはココに住もうとしてるの？」

「勿論だとも！じゃなきゃ、ここまで来ない…いや、仕事だから結局来ることにはなるんだよな、うん。うんうん、ままま、住むつもりは満々だぞ。この方が何かと都合がいいだろうしな。」

「…ここに他のグループが住んでいたとしても？…ふう、あれだけ強いんだから寧ろ快適かもね。でも本当に変わりもんだな…本当は同族だったりする？アハハヒッ」

彼女が楽しそうに何よりだ、素直に今の気持ちをそう落とし込んだ。

彼女と私はさつき出会って、互いに命を奪われかけた程度の仲であるが、どうにも私のことが嫌いではないらしい。

なんだかんだと言いながらも、私のふざけた実験にも付き合ってくれた。

さらにいえば、立場上捜査官の私に家まで紹介してくれたのだ、変わり者はどちらだと思う。

自分が彼女から見てどう写っているのかは分からない、けれど彼女もいろんな辛苦の上で必死に命を燃やしているのだ。

自分が反駁すべき理不尽の線路上に彼女は打ち捨てられている者の一人ではないか？

あの場で出会って、短くはあるが確かに共に命を謳歌した仲間である。

これからが楽しみになった。

社畜とゴリバニズム

ロマと三食ゴリラ昼寝付きセット

「ふ〜♪ふふ〜ん♪る〜るん〜♪」

ガチャヤ…カタカタ…キイイイ

ドオン!

「オツハヨウーゴリさんー！今日も食ってやるゾウ〜。」

私のここ最近のルーティーンはものすごく単純だ。

朝、廃マンション一室で目が覚める。

顔を洗って、髪を結び、彼が買ってきたインスタントコーヒーを2杯用意する。

彼の部屋は私の部屋のちょうど西側にある。

鍵なんかあっても無くても関係ないようなところだから簡単にお隣はお邪魔できるというわけ。

初めは思いの外私の部屋が近かったようで、腕を齧られる時よりも目を見開いていて面白かった。

ニヤハハ♪ダメだ思い出すと直ぐに笑っちゃう。

扉を開ける時は、申し訳ばかりのストツパーをゆっくり外し、ドアノブを捻ってゆるく開けて、一気にドオン!

「うおおおい?!えあ?おー、またしてくれたというわけですね…。あつ、そういうや時間!…ふう、おはよう、今日も助かった。」

まさか、毎日天敵の出勤時間に遅刻しないように起こして欲しいってお願いされるとはね〜、つつい、ウーウン!て勢いで頷いたのが運の尽きだったよ。

彼と一緒にバスルームに向かい、朝の糧を貰う。

目に掌をやって目隠ししたぞと合図を送ると、彼はそそくさと服を脱ぎ、寝汗と血を洗い流す。

彼は傷が癒え次第服装を整えると私の淹れたコーヒーを飲み干して足早に部屋を後にした。

昼、彼はどうやら職場で肩身が狭いらしい。

「物理的にも、精神的にもな。はあく、明らかに疎外感を感じるよ。まともに話してくれるのは、相方くらいだよ…全く、まだまだ就職してから1週間も経ってないってのに。」

「そういえば、あの日相方が来なかったのは俺の勘違いで場所を間違えたかららしいんだよ。いやーたまには勘違いもして見るもんだな。おかげで毎日遅刻だけはしない。」

と、とにかく肩身が狭いみたい、プププ。

とにかくお昼ご飯が終わると愚痴バツカリなのよねい。

一通り口を動かしたのか、彼はのそのそとバスルームに向かった。

あつ、私もご飯みたい♪

「ほら、どうぞ。頼むからおんなじところを齧ってくれよ、跡が残るとナゼか消えないんだよ。職場で着替える必要が出た時に説明が困るからね。」

ミチミチイ。

もむもむ……

アグアグ

くくフンく

ゴクン。

ペロリメ

いたずら心で塞がる寸前の傷口に舌を這わせる。

労わるなんて、自分にもしたことが無かった。

朝も昼も夜も、ダレカが 私のために 与エテクレタ もの。

彼は1噛み目が同じ場所であれば、2噛み目の傷はカラダの修復に
関係がないことを見つけたみたい。

だから、最初の1噛み目はズツと同じ場所。

最初に残った傷痕に被せるように、彼の腕を食む。

彼は確かに痛そうに見えるけど、決して瞳に怒りや侮蔑を浮かべない。

ジツと、私が満たされるまで。

ワタシのことを見ている。

気恥ずかしいけど大切な時間になったのは彼には秘密。

今までと、食べてるものはおんなじはず。

なのに、なんでかな…私と命を繋いでくれる　ダレカ　は　彼
じやなきやヤダなあゝって思うのは。

夜　彼は８時に家を出て、８時に帰ってくる。

同僚には悪いが眠たくて仕方がない…らしい。

彼は家に帰って、すぐに自分で頑張って通したシャワーを浴びて、
寝心地の悪いベッドの上に転がって、すぐに寝てしまう。

彼がシャワーを浴びる前に部屋に上がって、彼にその日最後の糧を
与えてもらう。

私がただいまと言うと、返してくれる。

まだ１週間にもなっていないのに、ずっとお隣さんだったように感
じてしまう。

今までにないくらい穏やかな毎日に戸惑う自分がある。

これが平々凡々な日常というのだろう。

「私は今が幸せだな…」

明かりの抜け落ちた摩天楼の隅で私が吐いた眩きは、夜風に冷たく
攫われていった。

となりのゴリラ

グトグトグトグト…

カツカツカツカツ…

「はあく…そろそろ休憩しないか？」

「ええ、そうですね。近場で喫茶店でも探しましょうか。」

本日5回目のため息を吐かれたのは、私の相棒である仮一等捜査官のフレッド君です。

彼は何というか、恐らく誰よりも大きな体をしているのに繊細で、なのにヤンチャというか行動的というか。

其れでいて悪い人間では無いんですよ、ええ、決して。

20区の廃マンションに居を構えている！と堂々と言われたときは驚きまくりでしたが。

あの屈強さは正直羨ましい限りです。

この前だって、原因が彼の勘違いだったとはいえ、私が出してしまった彼の失踪に関するレポートの取り消しを私以上に真摯に対応しておりました、どちらかというと必死の方が強かったかもしれまんけど。

それに、貴方はもう少し食べると、私をよく食事に誘っては山盛りの皿を渡されます。

私のことを気遣っているのはわかりますが…彼はとにかく大きいので、ただでさえ少食な私にあの量は難しいですね。

彼は良くも悪くも大きい人間のようですからね。

ただ〜直して欲しいところといえば…

「あの喫茶店なんかどうですか？」

「おお、おもむきぶかい？それっぽくていいな！入ろう入ろう。」

「ま、待ってください！」

「ああ、ごめんごめん…つついっ空腹だね。あははは（乾いた笑い）」

「いえいえ、問題ありません。さあ、入りましょう。」

「すまんね、つついめんどくさくって置いてっちやうんだよ、コレ、

えーと、クインコだ！クインコ！」

そうですねッ！あとクイン ケ !!です。

彼は何かに意識を取られると、クインケを忘れていくのです!!？
現に彼は足元に置いたつきり店に入ろうとしましたし。

はあく初出勤の日にも置いてあったせいで、本気でグールに食い殺されてしまったのでは？と確信してしまいました。

…失礼は承知で、翌日出勤してきたときは、初めて会うのもあって資料以上にデカかったし、何より生きていることに驚きましたよ。

幽霊かと肝が冷えました。

…それにしても、スーツ以外よく無傷でしたね。

「ニチャ…功善…お前の引き入れた男が初日から失踪したとかで騒ぎになったらしいぞ。」

「ああ、そのことなら安心しろ。20区を探していたら、あいつの方から私に会いにきたぞ。まあ、用件はこのことだったかな。新しいのは渡しておいた。」

「?…スーツが破れている。早くも戦闘したのか。それにしても…出血が酷いが…会ったのは死体かなニチャ?」

「…元氣そうだったよ。」

「ニチャ…ふん。そうか。得体の知れん化け物が居たものだ。この血液は採取及び研究に回そう。ニチャ何か面白いものがわかるかもしれん。」

「…新しく女が組織に入りたいと言っている…」

「ニチャ…最近はどうにも騒がしいな。油断はするな。いいな、功善。」

「分かった。」

だが、ゴリラ

…この気持ちは何だ……

就職？してから1週間が経った。

相方のクレオ氏もどうやら私のことをゴリラでは無く人として認識しているらしい。

…相変わらずマジックみたいなカラダである。

こっちの方が戸惑ってしまふ。

上司の中でも特にお偉いらしい和修なんたらとかいうダンディーもお前デカいな…とかつて驚いていたからそうなんだろう。

うむんむんむん、なかなかどうして周りの人の中でも限られた人しか私のことを知らないし、ましてやヒトだとは認めていないことはよくわかった。

中にはハッキリ「ヒイツ！キングゴングだあ！」なんていつてクインケを向けられたりした…すぐに気絶していたが。

だがしかし、それも仕方ないことなのだと思う。

想像して見て欲しい、貴方は職場にいつも通り気怠げに出勤。

自分のデスクに腰掛けて、タバコをふかそうと口にくわえる、しかしライターがない。

新人が隣のデスクらしいが、貸してもらおう。

横を見ると、そこにはドン！とびきりのデカゴリラ！

まさにコマンドーのワンシーン以上に警備員の大運動会、全員集合！

会社ごと仲良く出勤の事案である。

ジュラシックパークのティラノレベルで目を疑う。

3メートル越えである、それが人間だって後ずさる。

…私の周りの肩身が狭いのはそういうわけである。

はあく…食い扶持は出来たから満足だ。

夜露を凌ぐ寝床も、自分の肉が主食の可愛い隣人も出来た。

おかげで遅刻だけはしていない、たまに功善に呼び出されて無断欠勤するが…ゴリラに注意するようなやつはそうそういない。

それどころかハブられていることを除けば普通にオフィスワークをしている自分がいる。

ワークといつてもクレオの隣でレポートの資料を差し出したり、ここはおつかない、ここは安全なんていう地図の上でグールをプロファイリングしているのに合いの手を挟んだり…仕事らしい仕事は外回りくらいだな。

たまに机にバナナを置くヤツがいるのは悩ましいがな。

…つまり、だ。

私の感じているこの感情は、自分がゴリラと言うよりも人間として生きていることへの違和感なのだと思う。

つい1週間前まで動物園でぬくぬくと食う寝るの生活を満喫していたのだから、なんだか耳が痒くなるような、そんな不思議な羞恥心があるのだ。

気遅れ？差別？そんなもんじゃない。

なんとも言えない、新鮮というよりも客観的にヒトを見つめているように自分を俯瞰している感じなのだ。

自分はゴリラだと思っていたのに…なんだか落ち着かない、それでいてとても気分が良い。

なんだか自分がゴリラであることを再認識できた気がする。

私はゴリラだ。うん。

「ーっどくーん…ーフレッドクーン？」

「ん？ああ、すまない。ついついゴリラについて考えていた。」

「ごりら？君みたいな偉丈夫が言うとか何だか違和感がないね。ゴリラと君に親近感を感じるからかな？」

「どうだろうなッ。あそこ。あの空きビルの曲がり角にいるヤツ。アイツじゃないか。明らかに怪しい動きだぞ。それに…チャラ男だ！」

「ははは…チャラ男かどうかは置いて、確かに目撃情報と一致してるね。それに、地図上の範囲にも入っているし、今日の彼の動きは過去の現場を避けるように動いている…行こうか。」

「おう。」

「それと、仕事中に考え事は気をつけたまえ。君はずいぶん丈夫なようだがね。」

「すまない…汗」

今日の仕事は最近暴れてるグループの頭と思われる容疑者への張り込み。

ついでを言えば、動き次第駆逐…らしい。

ここまでは覚えている。

それにしてもあのターゲット。

見た目が明らかにチャラチャラしてるってのはいただけいなあ。

ゴリラは軽薄そうなチャラ男が大嫌いであった。

動き出した目標に対して私たちは一定の距離を開けて追跡し続けた。

どうやら住宅街から外れた広い貸し倉庫が立ち並ぶエリアに向かっていているらしい。

何も起きずに今日は帰れることを祈るばかりだ。

そう願いながら三つほど重ねられた倉庫と倉庫に挟まれてできた通路に向かった。

「倉庫の上だ！フレッド君！」

「いらっしやい。ハトのクソ野郎ども！」

おお！こんな時はまだまだ若いな、ヤモリの神兄貴。

アニキはいった、ゴリラはこええ

ヤモリ…本当に青少年だな。

まだ綺麗なヤモリなんだもんなこの時は。

くツ涙！ヤモリの神兄貴の綺麗な姿をよく見とこう。

とか言ってたらなんだか盛り上がり上がっているようだ。

古今東西舌戦から戦端を開くのは嫌いじゃない。

「お前がレートAのヤモリだな？お前を危険度の高い喰種として今ここで駆逐する！」

「できるもんならなあツ!!テメエら2人でどうにかなればいいがな、俺たちは正々堂々やる気はねえからなツ」

「アアにキイイイ!!」

「チツ、数ばかり集まるなど小賢しい!…しかしこの数は、まずは報告を急ぎましょう、この数は手に負えません!フレッドくツ!?!?!?」

「あ。」

ドドドドダダダドだダダだダダだだ!!

どガアッ!

メコオ〜〜:

つついついロマとのことを思い出して、気づけば全力突貫していた。

目の前がひどい有様だな。

ズルルううう

ドシヤリ:

あつ。

「あ、あ、あつアニキイイい!!」

しまった、上から降ってきたヤモリが丁度正面に陣取ってたから向かいのコンテナごとメタアアしてしまったようだ。

ああああ、こんなになって、鼻血とか大変なことになってるな。

うわあ、右腕、右足首から下と抜かりなく赫子も突進と衝突の衝撃でふにやふにやになっちゃったよ。

捻挫かな? (ヤブ医者)

ついでに両肺の肋骨まで…なんか色々丸見えになっていらつしやる。

「ガバアツ、ゲホツゲボお！ぐううう…ごどや」どうぞ……」

「…すまん。ここまでするつもりはなかったんだ。本の出来が心で……」

私、真戸呉緒はほんの数瞬間にこの世で到底信じられないものを目撃した。

レートがA以上と目されていた喰種を素手で、更に一撃で屠り、あまつさえ戦闘不能に追い込まれる様を。

これが同じヒトとして出来るものが存在しただろうか。

無論、常人の数倍のパワーを発揮することのできる人間は存在する。

彼らとて世界の総人口よ0.01%にも満たないが確かに存在する、一種のバケモノとさえ言える存在だと断言できる。

我々の上司である黒岩上等捜査官などは正にソレに該当する極めて稀なヒトである。

…しかし、それはBやCなどの下級、中級レートの場合がほとんどである。

強烈な格差を顕現せしめるAレート以上の個体に対してこうした手段、いわばステゴロを申し込めるほどにはヒトは強く無い。

だが、私の相手であるフレッド君はやってのけたというわけだ。

現に周りの手下グループも頭を一つ叩かれるだけで血に沈んでいる。彼はクインケに対して多少の執着や信頼の感じられない、あまり良い言い方では無いが調子に乗っている、そう取られても仕方のないような扱いであった。

グループに対して恐怖心がない、そんな物言いもあり私自身もたまに訝しんでしまうことがあった。

なるほど納得するしか無い。

「終わったぞ〜。はあ、全く。寄ってたかって俺を攻撃してくるんだ

からたまらんよ。それにしても沢山いたんだなあ。数えてなかったから少し壯観だ。」

「ああ、お疲れ様。それで終わったのはいいがトドメは刺さないのか？」

「トドメかあ…」

外見に反してどこか抜けているのかもしれない。

私は左手に持っていた彼のクインケを渡した。

「これを使ってみないか？君には必要性を感じなくなってきたがね。」

少々の嫉妬と憧憬を抱いた私の、密かな皮肉であった。

私も油断していたのである。

「ま”ただあ”あ”!!?!!?」

「ぐううッ!!?」

「オオウ!!?グア！」

跳ねるように起き上がったヤモリが鞭のように密かに修復を続けていた赫子をしならせた。

2人の捜査官は双方大きく跳ね飛ばそうと力強く叩きつけられたソレは。

特にどこか惚けた様子を見せていた真戸の足に痛撃を与えた。

「ツツづううづうッ!!?」

「ぐう…!大丈夫かッ!オイッ!クレオ！」

「ばははあはは…ペッ!第二ラウンドといこおカア！」

右足のふくらはぎの肉に大きな裂傷を負い、かつ衝撃をもらって受けた左足を骨折した真戸呉緒は立てなかった。

目の前に差し迫った殺気から逃げられないことに恐怖を感じる。

何かをやり残した気がする、そんなぼんやりとした感情とともに死相を顔を映しかけたその時。

ドウっパアアアンツツ!!?

強烈な破裂音が鳴り響いた。

爆発にも思えたその音の正体は、いつも穏やかな顔を覗かせる自らの相方の怒りを滲ませた表情の先、振り切られた彼の筋骨隆々の左腕とヤモリの顔面よ肉の合唱であった。

分厚い掌、筋肉の流動を感じる戦車の砲塔の如き腕をもって、瞬時に全ての筋肉を収縮し、全力をもって解き放たれた一撃。

被災者は顔面の歪んだ顔の皮膚を残して、その脳漿と頭蓋骨の粉塵を巻き上げた。

重力に引き摺られて、緩やかに高度を下げた赤い塊は、振り切られた掌の衝突点から力の向きを変えずに、画用紙に力強く線を引く赤いボールペンの軌跡の様相を暗いコンクリートの地面に描いた。

先ほどまでの手下のグール集団に対する掌底が、ほんの撫であげであつたことを両陣営に悟らせるには十分すぎる光景であつた。

「…やり過ぎたのは謝るが。お前達の頭も俺の相方の脚をやってくれたからな。何処かで負の連鎖は止める必要がある。まだ争うならば相手をするが？そこに大人しく寝ている。」

穏やかに、しかし明確に伝えられた指示はよく響いた。

体を起こした手下のグールたちは、倒れ伏しゆつくりと肉が胎動するヤモリの胴体に近づいた。

「あ、アニキ…早く、早く起きてくださいえ…」

先ほどの威勢とは裏腹に何処か現実への納得を匂わせながら男に声をかけた。

聞こえるのか、否か、それは関係なく集まった手下は彼に声をかけ続けた。

その頃、ゴリラは相方の異変に気付いた、どうやら白目をむいている。

「おつとおく…これはいかな。しかし、こいつらどうするかなあ。

…あつ！おい、そこのお前！」

「えっ！お、おれ？」

「そうだ！その将来目元に隈ができそうなお前！」

「なつ、なんだよ！てかつ、クマなんかデキルわけねーだろ！おれはグールだぞ！」

「どっちでもいい！俺は齧理羅！20区の廃マンションに住んでる。ちよんまげみたいな髪型の可愛い隣人のいる6歳のゴリラだ！ついでに言うところの前まで就活していた！」

「ごっつ、ゴツッ?ごりら?…ゴリラ?」

「そうだ!多分今ので合ってる、相方が危ないから手短に話すぞ!腹が減ても人を襲わずに20区に來い!場所は駅から3キロの距離にある廃マンションの下から10番目の階の左から1番目だ!」

「え?ええ?なんだって?!?慢心?三帰路?何言ってるんだよ?!?わっかんねえよ!ムツカシイコト言ってるじゃねえ!」

「…そうだったな!思い出したよ!悪い悪い。とーにーかーく!腹が減ったら20区に來い。そんで俺を探せ!そしたら肉を食わしてやる!」

「…ん。よくわっかんねえけどアニキには伝えとく!」

「ん!素直でよろしい!まだ小さくて食べ盛りだろうしな!近々また会うことになるだろう!いいか!絶対にヒトを襲うなよ!」

「サツサとカエレや!」

「じゃあな!」

ふう。どうにか種は撒いた。

彼らが私の迷惑通りに来てくれることを願うばかりだ。

よいしょつと。

はあー、軽い軽い。

やはりもつと食べさせないといけないようだな!

だが今はいち早くコイツを病院に連れてかないとな、まずはそれだ。

待ってるクレオ!

帰ったらモルヒネをもらってやるぞ! (言ってみたかった)

枯れ木に水をあげましょう

「……あ。あ……こ。こ……はっ。」

間接照明の照らす天井に清潔な白色、薬品やアルコールの匂い。

ここは病室のようだった。

「いたたた……うう。」

両の脚には分厚く包帯に覆われていた。

血のにじみは無く、どこか包帯の居心地の悪さを感じる。

どうやら包帯を取り替えてもらった後に起きたらしく、部屋には人の姿がなかった。

強烈な風圧と直前の両足から来る激痛に意識を手放してしまった。そのことは覚えていません。

けれど、あの状況で彼は私を救ってくれるだけの余裕があったのでしょうか。

いえ、あったのでしょね。

だから今こうして胸が呼吸で膨らむのを感じられるのでしょう。

病室の扉をスライドする時に聞こえる独特の音が聞こえた。

私の相棒が扉を潜るようにして身を縮こませて入ってきた。

「目が覚めたな。……すまんっ。私が気を緩めたから、君に大きな苦痛を与えてしまった。本当に、すまない。」

彼は私を見ると、見舞いの品だろうバナナを心底申し訳なさそうに渡してから、私に向き直り頭を下げた。

「あ、ええ。いいえ、貴方は悪くありませんよ。私など貴方が戦っている間棒立ちでしたから。いやはや情けない。」

「……すまない。彼らは取り逃してしまった。」

グループの集団のことだ。

だが彼がどれほど強くてもあの状況下で私を放って捕縛に当たるほど私の負傷は彼に時間を許さなかったらしい。

誰かに連絡を取ればよかったのに、私など置いて、グループわ即殺していれば……考えてもたらればだが、彼を責める意見ばかりが私の中で盛り上がる。

私は自身の命の恩人への恩知らずな思考に憤りを感じたが、勤めて明るく彼の顔を見て言い放った。

「…そうですか。…謝りにいかなければいけませんね。ハハハ！」
「連帯責任、というやつですよフレッド君。我々はパートナーですから、相棒、相方が互いに失態を共有するものです。今回は…ちと規模が大きくはありますが…」

「そんな時は頼みます！まあ、今は仕事のことはいいい。何より、クレオの命を救えて良かった。捜査官とはいえヒトだろう？命の貴賤は無い。本当に良かった！」

貴方が命がけで救ったヒトの命。

自分の命の価値を思い出した。

「…ありがとう。私は貴方を見誤っていました。あなたがパートナーでよかった。むしろ私がお礼を言いたいくらいです。」

「うん、うん。ありがとう。そう、だな、俺たちはパートナーだな。これからは俺がクレオの苦手なところをカバーしてやらんとな！」

「ええ、そうです。これから、改めてよろしくお願いしますね。」

「ああ、事務仕事は任せたぞっ！」

「そこですかっ、あなたもたまにはお願いしますよ！」

ヒトが身一つで凶悪なグールの身を砕く。

私はその光景を生涯忘れることは無いでしょう。

絶体絶命の瞬間にみた貴方の剛力には正に理不尽を感じました。

しかし誰かのために振るわれた理不尽は、紛れもなく熱をはらんでいました。

私もヒトです。

社会、人間、自然、何の感慨も抱かない冷たい理不尽を味わってきました。

しかし貴方の見せた理不尽は今までの私の理不尽全てを嘲笑うように破壊してくれました。

これまで貴方に対して何処か壁を感じていましたが、壁は私が作っていたようです。

怪我が治ったらどこかに食事にいきましよう。

外回りでは頼みますよフレッド君。

あつ、バナナは貴方が食べるんですね…

なんとも面白い相棒だ、きみにはいつも笑わされている気がします
ねクククツ…。

ゴリ友

ぐううううう〜…

ぐううーぐうつ、ぐ、ぐううううう〜

「そおい！」

ドスン！

「ふガア！ふああい？うむむ…ありがとう、起きたよ。」

「うむうむ、おはよう！今日は出かけるんでしょ！早くいこいこ〜♪」

「おーおー、ちよびつと待つてなあ…はあ、ベッドが小さいこと以外は良い寝床なんだよなあ。」

「ゴリさんのびのび寝れるベッドなんてキングサイズくらいだろうね〜、いやそれで小さいかな？」

「まあ、そんなもんだろ。よしっ！ほら、風呂場行くぞ。」

「おおー！いつもすいませんねえ♪」ニヨニヨ

「いいってことよ、ゴリラに出来ることをしているまでだ。むしろロマの方が食べやすいと思うんだけど？わざわざ私の腕に噛みつかなくてもいいんだぞ？」

「あ〜、私はコツチの方が味が良く感じるの！それとも、ゴリさんは女の子に齧られるのはオキライ？」

「う〜ん、齧られるのは好きじゃないけど…ロマは嫌いじゃないから齧られてもいいぞ。」

「…ポツ…ふ、ふくん。そっか。それなら、私はこっちが良いの。いいでしょー！」

「ああ、お前がいいならそれでいい。私も慣れてきたしな。ハムスターかなんかに餌あげてるみたいで楽しくなってきた。痛みに鈍くなつたとはいえ痛いけど。…つと、ほれほれ。」

「いただきます♪」

カプ、ミチミチ

ビチツ…ミリミリ…

アグアグ…ゴクン！

…ペロリ♪

「うおつうーおいーいつもソレするけど楽しいのかよ!? 私は何回くすぐったくて仕方ないんだが。」

「ええ〜いいジャン。私は楽しいよ!」

「そうかい、ま、いいけど。そんじやあ血を流したら待ち合わせ場所まで向かうから。ほら、行った行った。今日はさすがに見苦しいシャワーシーンを拝ませんぞ。」

「ブーブー! けちー! 減るもんじやないのに〜。それじやまたね〜。」
はあ、どうやら納得してくれたようである。

ロマに初めて会った時は何かと驚いたが、元々の人となりがフレンドリーだからか、自分の肉を主食としていること以外何の問題もなく楽しい毎日をおくれている。

毎食腕を食まれることは痛み以外に問題はない。

数秒で元のゴリラアームに元通りである。

シャワールームに入るのに難儀したことやベッドのサイズが合わなくてもへこたれない、なんだか逞しく育っている自分に拍手を送りたい。

それはそうと、今日は功善と会う予定だ、帰りにヤモリと愉快的仲間たちのところにもよる予定である。

シャワーで一通り血を流したのでいつもの特注スーツに着替えて家を出た。

「遅いぞ。」

「すまん。」

「へえー、この人がクレーゼンさんね。」

「…グールか?」

「ああ、いまはコイツの隣に住んでる。あと、コレ持ってきたぞ。後で食ってみろ。コイツからは好評だった。」

「…貰っておこう。それはそうと、今日呼んだのは他でもない。お前があの日言ったことを思い出したからだ。」

「……憂那か?」

「…お前はどこまで知っている…まあいい。そのことについてだ。彼女は私に何を及ぼすのだ？お前はナニカを知っているな。」

「知ってはいるな。上手くいけばいつかお前さんに助けを求められるのは確かだな。今ではないが。」

ゴリ友：2

午前10時を周り外には人通りが増えていく。

繁華街から離れた所にある年季の入ったコンクリートに囲まれた地下駐車場が待ち合わせの場所であった。

退屈そうに足を揺らして少女が一人入り口近くの排気パイプの上に座り人間の出入りがないよう見張っている。

駐車場の中には冷たい空気が満ちていた。

二人の男が対面している。

方や白のテントの様に分厚い布地のコートを着心地狭そうに身につけ、黒光りする鋼のヘルムで顔を覆った偉丈夫。

方や黒のコートに黒の帽子を被り顔を不可解そうに歪めるダンディズム。

言葉を選び終えた黒い帽子の男が重々しく口を開いた。

「……私がお前に助けを求める？……どう言うことだ？」

「そのままだ。お前には避けられない事ではあるが、私に託せば上手くいくことを約束しよう。ちょうど、旅行の準備を始めているところだよ。」

「お前が何を言っているのか分からんぞ。ふざけているのか？」

「大真面目だよ。功善……君は彼女に惹かれているのだろうか？」

「!?……何を言うかと思えば……いい加減にしろ！アイツは正式に組織に属しているとはいえない……いわばグレーゾーンの人間だ！ましてやヒトだ！私とはそもそも分かり合えん。」

「今はそう言うだろうと思っていた。……君はこれから苦悩する瞬間が必ずやってくる。だが、それは本来なら悲劇の道になることを私は知っている。勿論今すぐ信じてもらおうとは思わない。まだまだ時間はある、私はもつと君のことも知りたいし、君に私のことを知ってほしい。今はそれだけ覚えていてくれれば私の言うことはもう無いよ。」

「……相変わらずだ、全く理解できん。……しかし、私も一度は命を拾った

身だ、初めて会った時から自分をゴリラと言ったり、本当にゴリラの檻で寝ていたり：ほんとうに、お前は変な奴だ：。：わかった。今度食事会でもしよう。食べるものは違うがな。」

「うん。ありがとう。それでいい。：ロマー！待たせて済まなかった！もう用事は済んだよ。」

「ホントだよ！～っただけ待たせんのさ！早く行こ行こ♪」

「そう言うわけで、：また会おうな功善。俺は理不尽と悲劇を破壊することが生きがいの変なゴリラだが、嘘は言わないと約束するよ。」

「……ふふふ。仰々しいゴリラだな。：ああ、また会おう。」

「ごくりさあーん！置いてっちやうよー！」

「…悪い悪い。今行く！」

……憂那。確かに私は彼女に惹かれている。

お前が私の何をどうして知っているのか、正直あの時から疑問が絶えない。

しかし、確かにお前はウソはついていない。

私のことを短い間にもかかわらず人より理解しているのか、はたまた何か特別な情報源があるのか、私には皆目見当がつかないが確かにウソだけはついていないのだろう。

そもそも、ウソをつくようなズル賢さがお前にあるようだったら、なぜあの動物園で全裸のままヒトの見世物になろうなどと思うのか。

お前は確かにゴリラなのだろう。

私には人間にしか見えんが：確かにお前の力強さを見せつけられれば、お前がゴリラだと言われても納得するかもしれないな：ふふ、全く変なヤツだ。

いつかその選択の日が来たのなら、お前に話してみるのも悪くない。

：それにしても、この明らかに怪しい新聞紙に包まれたブツは何なのだ？

ガサガサツ：

カサ：！！？

に、肉？

…ンん、なんだこの薫りは…ヒトの肉…か？

いや、違う…アノハナシは本当だったと言うわけか…。

フツ…まさかここまで変わったヤツだとはな。

なるほど、グールに会う程度では動じない訳だ。

自身の肉をグールに配る。

とんだ捜査官もいたものだ。

社会にも人間にも見捨てられた我々グールからしたら夢のような、
正に天使か何かに当たるかもしれないな、ゴリラだが。

本当うに、大した齟理羅だ。

ゴリの大兄貴

「ねえねえくもうすぐじゃない?…ほらっ見えてきたよ!」

「二ゴリの大兄貴イイイイ!!」

「うわあ…ゴリの大兄貴だつてえくく!ブププ!」

「兄貴!お疲れ様ですツ!」

「ゴリラの兄貴お疲れ様です!」

「毎週ありがとうございます!」

「今日も読み書き教えて下さいです!」

「おおおう、うんうん。わかったわかった!わかったから一旦落ち着

けヤモリ軍団ン!」

「ニヤハハハっ!!ゴリさんっ、必死!ツツアハハ!」

「二はいいいいイっス!!大兄キイイイ!」

「はああー……」

「ふふふ、もうお疲れだねく♪これからだよ!これから!」

「わかってるよ。だいじょうぶだ!俺はゴリ兄貴だからな!」

「そうなのだが…」

「おいおいどうしたヤモリ軍団。」

「この前本当に肉を全員分用意してから手のひら返しがるつくる。」

「まったく、現金な奴らだ…向上心あふれるあの子はホオグロと承正

かな?」

「ま、それは後で良いとして。」

「ほらほら!並べならベエい!」

「順番を守らんやつとヒトを襲うのはワルイグールだああ!」

「オマエたちはワルイ子なのかー!」

「二ちがいまあー!すうう!!」

「うむ、元気なお返事ができてアニキ嬉しい。」

「そんじやならんだからい前と同じようにくばっていくぞー。」

「先ずは、ハイ。」

「ヤモリの分、いつもみんなをまとめてくれてありがとうよ。」

「あ、ありがとうよ…アニキ……」

うむうむ、再開した時はチビるくらいビビりまくってたもんな。
その節はホントごめんな、やり過ぎたの感はありまくりだったから。

仲直りできて良かったよかった。

次、子ナキ！

お前は正に最大のこうろうしやだぞ！

「あ、ありがとうございます、います、ゴリラのアニキ…こーろーしやって何すか？」

お前がイイコだつてことで良し！

「オレすっげえ…ありがとうございますさっすまっす!!」

うむうむ、まだまだ日本語であそぼだな！

次は……

つつがなくその日の配給を終え、ゴリ島ゴリ八郎先生によるゴリゴリバナ塾の時間となった。

これは、さる日に彼が感じた彼らグルへのモラルや基礎的学力、品性やらといったヒトの社会でも生きられる為の下地を育む目的で始めた青空教室である。

ついでに争いの絶えず心の擦り切れてしまっている彼らは娯楽や打ち込めるものを提供し、更に動物園での自身の穏やかな日々を送る幸せを経験談兼人生の教材として彼らに伝えることでグルなり幸せを個々人に模索させようというのである。

意外に好評を得ており、特に読み書き、計算に関してはロマとヤモリ、ナキも熱心に耳を傾けている様子である。

因みに今日はホオグロと承正が足し算引き算とひらがなをマスターしていた。

優秀な生徒を持つて私もニツコリである。

今日は休日ということもあり、3時間もゴリゴリバナ学園の授業は続いた。

終わればみんなでお昼寝するらしいので私も横になった。

頭のヘルムを外したら、ヤモリと子ナキに「顔は意外と綺麗なんだ

な……」

と驚かれた。

なんだか納得がいかないようにも思えるが、彼らにとつても私は人間に見えるらしく、どこことなく安心している私もいた。

ロマは眠そうに目を擦って私の元にやってきた。

「……くりさくん……私い、くりさんのうえでねてみたいよ……わたし
のべつどになつてよう……」

くっ！可愛いこと言うじゃないか！

しかし、私はゴリラだぞ？臭くないのか？

「ぜんぜんそんなこと、しないよ。いいにほいだよ……だから、ね
？」

グハツ！くツ、不死身のゴリラともあろうものが！

上目遣い（背の関係で常時発動）に負けようとは！

だが……いい人生だった……おやすみ、ロマ。

「……うん。おや、す、み……くり、さ……スウ……スウ……」

……動物園の頃を思い出した。

そう、だよな。

いつもヒトの目を恐れながら、押し込めて押し込めて、そうやって
生きることを強いられてきたんだもん。

強い弱いは関係ないもん……ちいさい頃から、誰かに愛されたいと
思つても、誰も許してはくれなかったんだもん。

寂しいんだよな、みんな。

ぐおおおお……

クウ……クウ……

ふふへ……もうたべられ、ないよ……スウ……

ふごっ……フガフガ……くうううう……

そうだよな、今まで食べて命を絶やさないことで精一杯だったんだ
よな。

淋しかったんだよな、こいつらみんな。

ヤモリは強い……ナキも強くなる、他の奴らもそうだろう。

だけど、誰かと一緒にいたくつて、その一心でアニキ兄貴つてヤモ

リの背を追ってたのかもな。

強さに憧れるつてのも、いつかヒトに復讐する為つてのもあつたかも知れない。

けど、本当は腹一杯食べて、誰にも憚ることもなく、ゆっくり寝たいと思つてたつて悪くないだろうに。

今のいつときとはいえ、自分の生んだこの時間がどうにも尊く思えて仕方がない。

私はゴリラだ。

だけど、グールなりに幸せになつてほしいと思つた。

ヒトですらないグールでもない、タダのゴリラなのにな。

ゴリの大兄貴：2

ゴリラ：そう言ってそいつはどっかにきえた。

ハトなのに食わせてやるだの、20区にこいだのとちゅーもんが多いやつだ！

だけど何も言わないでやるのもなんかもしわけねーなと思った。ヤモリのアニキもだいぶ治ったみたいだ、よかったあ!!

「ナキ……ハトの野郎は？……くっ……」

「「あにきいいいいいい!!」」

ダキツ!

「あ、鬱陶しいぞ！おめえら！……ナキ？どうした？」

……言った方がいいよな……うん、そうだな。

リチギってやつだ。

「あ、アニキ、ゴリラのヤツが20区で待ってるって。」

「??ごりら？……ハトのデカイ方のことかあ？……くくく、成る程確かにゴリラだ……」

「どうするんだ？アニキツ。」

「行くに決まってるんだろ！明日だ！明日行くぞ！」

「「おおお！あーにキイ!!!」」

「アニキ！だ、だけど！ゴリラが、腹が減ったら来いって言ってたぜ……」

「イラア……へええ、ずいぶん舐められたもんだなあ……、食べるもんなら食ってみろってことかツ!!ええ？」（違います）

「よし決めた！今日は明日に向けて腹を空かせる。おいオメエら！もう寝るぞ！」

「ええ、あ、あにきいいい……」

「ほらっ！さっさと寝ろ！」

おやすみ！……といってアニキは寢床に一人かけて行った。

俺もかえらねえとな、あ！そういえば、ヒトオクウナのはなしを言い忘れてた……まあ、明日にはアイツは食べられるわけだし、気にするもんでもないな！

ああ〜待ってくれえーアニキ〜!!

おお！偉い偉い！

ちやんと言いつけ守ってヒトを襲わなかったのは偉いぞ！

襲われたらどうしようか悩まずに済んだな！

まずは、まあここでいいからとにかく丸くなって座れ！

そうだ、そうだ、素直なグールは好きだぞ！

よしっ、座ったな。

それではでは、こちらに見えるはゴリラ肉！

世にも不思議なグールも食べられるゴリラ肉にござーい!!

ナキ！先ずはお前からだ！ロマには好評だからな、多分お前も気に入るぞ！

お前は一番頑張ってくれたみたいだからな！

20分前……フワフワフワン

服を着たデカイゴリラを見たと言うグールに案内させて小綺麗な
廃マンションに手下共々突っ込んだ。

へへへ、今度という今度はゆるさねえツ！

顔も体もズタズタにしてくれやがって！

俺を放置してどっかに行きやがったことを後悔させてやる。

ナキの珍しくハッキリした物言いに従ってここまでできたが、どうやらホントらしい。

向こうで何があつたかしらねえが、「スマンツ！今すぐ出ていく！」
っていうアイツの声が聞こえた。

へっ、どうやら呑気に御近所トラブルらしい、いまに見てる！と俺も
赫子を唸らせて跳躍した。

崩れた壁から入って着地すると割れたガラスが足元で騒いだ。

ナキの言つてた通り、確かに目の前には目的のガキがいる…。

ガキ???

「ゴリサンはよくても…アンタたちはユルサナイツいいい!!」

べ〜おおおおお!!!

「ワレハ”うろんの母”!!部屋の壁マデ壊したのに飽き足らず!恋スル乙女ノ素肌マデノゾクトハ!!!シニサラセエ!!」

ズダドドドド……!!!

………なっ…グハツツ!!!

…待っ…フベラツ!!……

………助k…ウボツ……

「ふん!これくらいにしてやるけど、ありがたくおもえよおお?」

もう…ボロボロだよ…

くそう……何なんだよ……

こんなことなら、昨日ヒトを襲って喰つときやー!ー!「おい!」?

「ロマ!?どうしたんだ!??ってあつ。ご、ごめん。着替え終わって

からでいいぞ!!うん。」

「ふふふ、ゴリさんってばうーぶーだーな?コノコノく。」

「確かにタオル巻いてるけどくチャンとパンツは履いとるぞく…

ソレツ!!「よっよせい!」キヤツキヤ

ご、ゴリラ…くそう、チクショウ!

部屋つ、ま”ち”がえ”だ!!!

「はあつ、はあつ、ようし、私はあつちを向いているからちちゃんと服に着替えてきなさい!いいね!……?あ、もしかして、ヤモリか?」

「だっ、たら、な、んだ、よ…」

「待ってる!今ブツを持ってくるかツ!??ろ、ま。ドウシテフク

キテナヒ…!あー!ー!あー!ー!、俺は何も見えないぞー!、スマ

ンんんん。」

「ふふふ、計画通り♪ニヤ」

――

――

「ふう、ふう…ロマ!ホントに服は着たんだな!??開けるからな!」

「着てますく!ゴリさん以外の前で裸でいるわけなくいいジャン♪」

「お、俺の前でも裸でいるんじゃない!全く…ふう、お待たせ!すまんなあ、ほら持ってきたぞ。食べてみる。」

――
――
――

こうして現在に至る。

むぐむぐむぐ

もぐもぐもぐ

ムシヤムシヤ

アニキも俺もみんな丸くなって座った。

俺とアニキ以外は皆んなゴリラに貫ったナンカの肉をすぐさま黙って食ってた。

俺はよくわかんないけど褒められた、なんで褒めんのかわかんねえけど正直嬉しかったから顔をまつすぐ見れなかった。

アニキより先にもらった肉をすぐに食べるのはなんだか勿体ねえと思つて、じつくり見た。

目が霞んだ、何で目から水が？

う、うう、あれえ、止まんねえ。

ウ：ウツく、う：ウウう：

声に驚いて顔を上げるとアニキが泣いてた。

ふっ、ふう、うう、ううう：くうう：うツ：

周りを見たらみんな泣いてた。

さつきまで食べてたからか、小さくなった肉をわざわざ両手で握つてみんな泣いてた。

アニキの肉には一口分齧ったあとがあつて。

美味くて泣いてるのかと思つたけど、俺は齧ってないのに泣いてたからちげーのかなとおもつた。

みんな痛いのか、くるしいのか、そう思つたけど違つた。
どこか嬉しそうだった。

「お、おい大丈夫か？…毒じゃないとは思うけど。泣くほど美味しいのかよ？」

困つたような照れたような顔でゴリラは声をかけて回つた。

「今日のために用意したんだ。さあ、腹減ったんだろ？食っていいんだぞ。ヒトがブタとかウシの肉を食うのとおんなじだ。お前らは今までの人生でどっか悪いと思ってるのかもしれないが、俺みたいな変なゴリラもあるってこった。この肉は誰かを殺してつくったんじゃないやねえ。方法はまだいえねえが俺は嘘はつかない。安心して食ってくれ：どうした、ナキ？食べないのか？」

……変なヤツ、だけどなんだかあったけーヤツだと思った。
がぶ：

もくもく

いつも食ってる肉はもつと血の味がして、どこかむごくおいしいとはおもったことがなかった。

生まれて初めて何かを食べて美味しいと思った。

ありがとう。

ゴリバニズム

私の体は淡々と変化を受け入れている。

何の抵抗も何の拒絶もない。

ただただ自分のありのままの行く末に身を委ねている。

自分の体なのに特に冷徹である自らの心中にはやや愉快さを覚える。

先日、功善と語らい、ロマとヤモリの一味と共に微睡みを嗜んだ。

私は前々から感じていた自身の肉体に対する疑問を一度封ずることとした。

早々に破られるにおいが臭いがどうでも良い。

私の心持ちの問題である。

私のカラダは確実に常軌を逸した完成を目指さんとしている。

私の身体は私の心を残して成り立っているかのようだ。

身体とは心と体である。

しかれども、今の私に操を手繰ることの出来るは自身に宿る芯のみとなった。

私のカラダはもはや私を頑なに傷つけまいと丹念に引き絞られる鉄の如き強靱を顕にしている。

私は自らの肉を、この社会に、人間に打ち捨てられたヒトの片割れたるグールの糧として与えることを一つのあり方と認めた。

稀有、奇怪、奇特、独特、様々な言葉で尽くす必要はない。

私くらいの変わり者がいてもいいのではないか、そう思い、その通りにしたまでである。

私の生まれた日本、現代日本の求めるヒトは唯一無二のナニカであつた。

である、と言うだけで生存を快く受け入れられる時は既に廃れ、あくまでもそのヒトのもつナニカを求め、結局はそのヒトには関心が希薄な時代であつた。

何かをする、何かがあるという古代からの優越を求める思想に駆ら

れて誰もか万物をかき混ぜ、物色に励んだ。

強迫観念は排斥を生んだ。

上昇志向、向上心、上に行くほど霞む自分自身。

何かに惑いながらも混沌と享樂のもと便利で物質的豊かさに気を
奪った。

煌々と街はうねり、ヒトの行く末は一寸先といえども闇である。

現実はあるかもわからない将来と、均一の整形された子孫に丸投げ
するのだ。

私は疲れていた。

それがどうだ今はゴリラとして命を燃やしている。

私に比べてグール達のなんと逞しいことか。

私はモノを食べる。

モノへと変えられた命を自身に継承することを万人から認められ
ている。

否定などされることはなく、哀しみもせいぜいである。

しかし彼らは違う。

いつときの平穏すら、大多数のヒトの偏見と命の天秤がふざけたお
かげで踏みつけられてしまう。

彼らは喰うことを最悪な罪であると判決を下され、命をつなぐこと
への免罪符を与えられることがなかった。

理路整然とした矛盾のもと、ナチスの熱狂が生んだ残酷との酷似を
ヒトは鼻で笑い否定する。

命は食い食われることで継承される。

私は今のところソコから外れようというのである。

ロマに初めて齧られた時、確かに痛みを感じていた。

私の痛みは自身の生命と身体の調和を象徴するものである。

今の私はい先日から痛みがない。

私は自身の身体の変容の究極として命と肉体と心の乖離を認めざ

るを得ない。

私はゴリラだ、これからの永きに渡り私の眼前で起きようと言う悲劇を破壊するためには持ちゆる手段の一切合切を吐き出すつもりである。

私は自身のカラダを傷つけられないことに気づき、すぐさまロマに頼んだ。

彼女の赫子に自ら貫かれることでまとまった肉塊を得ようと考えたのだ。

彼女はどこか戸惑っていたが私の願いを聞き入れたてくれた。結果は成功。

私の体は頭を残して地に沈んだ。

体は傷つくことがなかった。

床に手をつき体を確かめたが衝撃以外はなににもなかった。

代わりに足元に1キロはあろうかと言う肉塊が蹲っていた。

ロマに食べてもらおうと私の味がするらしい。

私の体は進化を遂げた。

私を唯一のナニカへと押し上げたのだ。

私のカラダは傷を拒み流血を断固として拒んだ。

骨は軋むことすら無かった。

腕の噛みキズはそのままだが、体調は頗る満ちている。

十分に飯を食い自身の身を削るイメージを浮かべ掌を皿の上へと向ける。

私のゴリラアームは遂に300キロカロリーあたり1キロのゴリラ肉を掌から生成する異能を手にした。

私はどうなってしまうんだろう？

追加の肉を生成するためにバナナを頬張りながら今日もかんがえる私であつた。

ネズミ小僧とゴリラ坊主

「うっぷ…う…うっぷ…。」

「大丈夫なのかい？なんだか触れてはいけない気もするけど、スゴイ顔をしているようだが？」

「た、たべすぎで…うっぷ…け、けど、わたしにはやらなければいけないことオオろ…うっ…ハアハア！つぶない！危なかつた…」

「君の前で食事をしている私のことを忘れていないだろうね？」

「ごめんよ、クレオ…だが、ほんとに、この、りょうり、は…おおいしいな！アハ！アハハ！」

「ふーむ、なんだか納得いかないが、さつきまで美味しそうに食べていたのは事実だからね。私は相棒を信じるよ。さ、そろそろ会計にしよう。」

休日2日目、週休2日制に感謝である。

問題は今朝まで肉を腕から生産し続けていたせいで死にはしないとはおもいつつも空腹がマックスだったこと、これから更に動く必要があり食べられるのは今しかないと詰め込み過ぎたことだ。

「これ、君の飲食代が8割を占めているね…私が4割払うよ、なんだか君は君で大変そうだからね。それにしても、本当によく食べたね…その体だから納得できる量だよ。」

カラカラカラカラ…ジャカン!!

39050円になりまーす！

へあっ!??

そ、そんなに食べていただろうか…

日は中天に登り、街ゆく人々から恨みを買っている。

「あ、暑い…今日はアイスクリームが売れるだろうな…」

「同感だよ。私たちは薄着になるにも自分の命は惜しいからね。少しでも生存確率は上げておこう。」

「あ、あ…そうだな。」

まさか、まさかの出来事である。

偶々ターゲットを捕捉したクレオ捜査官はわざわざ食事会の帰りにボランティアを行おうと言うのだ。
端的に言つて勘弁である。

職質的な乗りで問い詰めたら案の定逃げたので追い詰めることにした。

追跡する間にクレオとはなれたが私一人でも捕縛は可能だろう。

男のグールはレートは低いのに対して残酷な性分で危険度の高い個体らしく、この前読み聞かせてもらったレポート通り、短気ですぐに暴発したらしい。

私へ振り返ると同時に躍りかかってきた。

「うおおおおおおおおおおおお!!?!?!」

ぐあつつつ…ごひゆうつ!

甲赫による豪快な一振りが高速かつ正確に私の体を打つのがわかる。

ごががきかかカカ!!

ふおんツ!

腕を一振り

ガリツガリリリららら

甲赫の硬さをゴリラの黒々とした右の丸太腕で受け止める。

明らかに異常な音が響くが私はいつものごとく力を込めた左腕で反撃する。

グおおおん!

「?!?! ツチイイ!クソがあああ!」

ピツと退く男の腹を左の人差し指と中指と薬指で抉り裂く。

手応えを感じて相手を見ると、男は腹から腸がはみ出していた。

相変わらずの威力である。

ギャラリリららッ!

鋭く私を穿とうと突き出された歪な剣の形を模したそれを右手でしかと握りしめた。

「ツツひ、やめっ…ぎやみウウウウウー…ブブブ…」

右腕から伸びているソレを軸に、マラソンの応援のために沿道で幼児が持たされる旗の如く振り回した。

右、前、左、右、後、最後に肩のもとを掴んで頭から地べたへ叩きつけた。

奇声を発した男は暫くののち目と鼻と耳から血を吹き出して沈黙した。

…死んではいない、と思う。

「…はあ、はあ、やっと追いつきました！フレッド君！大丈夫ですッ？！
？…よねえ、ええ知ってましたとも。さつきいきなりコンビニのトイレの壁

を突き破って追いかけて出したときは驚きましたけど、流石ですね。」
「俺もそろそろ仮一等捜査官に昇格してもいいと思うんだけどなあー。」

「実力ではない部分がからつきしなのでは?？」

「そう言われると痛いなー」

二人で談笑しながらテキパキ男を捕縛していく。

駆逐駆逐と上はうるさいが、私が戦闘不能に追い込むと随分品行方正なグールになる、とコクリアからはとても好評なのが複雑だ。

まあ、今回はBとかCの小物だったからな。

あ、無論いつも通りクインケは使っていない。

夜になったことを喧騒の消えた街の通りが教えてくれる。

あの後いつもどおりコクリアへ引き渡し、証書やらレポートやらを嫌々休日出勤でオフィスに出向いて終わった。

周りの目は相変わらず痛い。

丸手君という毒舌というかりアリストといか、そんな雰囲気の子と廊下であって後ずさられた後、「いつもご活躍は耳にしておりますー」とかなんとか言われた。

照れまくったのは秘密だ。

それにしても最近の子は礼儀がなっているなあ（*満7歳のゴリラ）

彼は一等捜査官だった気がするのだが…。

ウチのクレオも一等になったんだったらしい…らしいけど。

「この通りには三人…」

「このマンションには二人、しかも親子…」

「この通りには四人…内二人は兄弟…なるへそ…」

いま、夜の街を駆け回っております。

上下真つ暗のドデカ合羽に、真つ黒のゴリラの顔がゆるーくプリントされたお面をつけて、全速力で20区を走り回っております。

いやねえ、あどでえ、ぼぐね”え”、昨日から夜通し溜め込み続けたゴリラミート（命名ロマちゃん）をヤモリ一家に調べてもらって地図に書かれたグールの分布をもとに配達しとるんです。

はい。

ゴリラデリバリーですよ！

働き始めてかれこれ1ヶ月、功善とも何度か食事に行ったり、クレオとかと飲みに行ったり、ロマとゴロゴロしたり、ヤモリ一家の先生（給食と国数）したり、外回りしてグールとかヒトのチンピラとかヤクザとかボッコボコにしたり…：思ったよりも色々してるな。

まあ、ただフラフラしてたわけじゃあないんだぜツ！ビシツ

私の天才的ゴリラブレインはこう考えたんですよ…

：腹を空かせたグールに私のゴリラミートを食べさせれば食人件数が激減するのでは？…と。

どうよ！この完璧な証明は！！ドヤア（驚異の脳筋100%QEDである）

まあ、そのために場所を割り出したりと色々大変だったがな。

これで20区の完全掃討カッコカキは実現され、私も職場でタダの変なゴリラ扱いを改善できるという訳だよ！！

フハハハ！笑いが止まらぬわあ！

拾え拾ええい！

我がゴ慈悲に感涙し咽ぶがいい!!

次の外回りでの目標グループと事件の立件数がどれだけ絞られるか
楽しみだわい!

H A H A H A H A ……………

この日から20区の喰種によると考えられる食人事件の立件数は
往年の一割以下へと激減。

CCG上層部はなんらかの大規模なグループの集団失踪による他区
での被害増大、もしくは組織的なグループによる襲撃を警戒したが杞憂
に終わった。

本局の局長は、今回の件に伴い該当地域での大々的な活躍が知られ
ていながらも外見の威圧感などによるイメージダウンを恐れ保留と
なっていた仮二等捜査官フレッド氏を公的に表彰し、仮では無く正式
に一等捜査官としての昇格が通達された。

一方で、東京一の安全地帯、グループとヒトとの共存地帯などともて
はやされた20区では、大声で笑い声を上げるゴリラそのままの大男
が夜の街を駆けるといふ通報、噂が多発し、都警はパトロールの時間
帯を集中させるなどの警戒及び原因究明に務めるとの旨を発表した。

ひとり喜びと困惑に胸を跳ねさせた新任一等捜査官がいたことは
ゴリラの隣人と本人の溝知ることである。

賑やかになる職場、増える隣人、逃げるゴリラ
超大型（物理）新人フレッド君

私、黒磐巖は世の為人の為に喰種を狩ることを職業としている漢だ。

CCGという組織に属している。

噂の超大型新人が早くも一等捜査官へと昇級したと聞き、新芽の成長著しさに感嘆したものである。

興味を掻き立てられ、彼のパートナーはクインケの扱いに長け真面目で有名な後輩の真戸君だったのでどんな人となりなのか聞いてみた。

「うむ。うむ。うむ。」

真戸君によると、実力は圧倒的、人身では到底不可能なはずの荒技を事も無げにくりだす、いつもはヘルムで隠されている顔は意外にも大変整っており、そのずば抜けた巨躯の逞しさに一輪の花を添えているという。

他にも、身長を測ろうとしたら彼に合う器具がない為地べたに寝そべってもらい巻尺で測ったとか、体重計に乗ろうとしたら片足に乗せただけで200kgを超えており担当から止められたとか、さらにさらに局内のトレーニングジムでは凡ゆる最高重量を汗一つかかずに上げまくっている様子を目撃されたらしい。

聴けば聴くほど謎が深まる、しかしそれと同時に興味や不思議な魅力に溢れた人間らしい。

私は彼に直接会ってみようと思いたち、一路彼がいると言うオフィスに向かっている。

「ふむ。ふむ。ふむ。」

鼻息荒く丁度角を右に曲がろうと言うとき、ドし！つと人とぶつかってしまった。

しまった、注意緩慢であった。

謝ろうと思いいつもの通りに少し屈もうとすると…

「ごめんなさい。クロイワ上等が私に会いたがっているとクレオから聞いたので急いでいた。怪我はないだろうか？」

そんな言葉が頭上から降ってきた。

私は30そこらではあるが、局内の大半よりは縦にも横にも大きいほうだ。

無論、こと筋力や逞しさに限れば10指に入ると自負している。

これまでの人生でそんな私が道や廊下でぶつかれば、謝るのは決まって私であった。

…なるほど君が超大型君か。

すまんすまんと謝罪しながらそそくさと私に会いにいくと足を急ぐ彼に声をかける。

私は思わぬところで出会った彼に自分が黒岩だと伝え、この縁に食事に誘うことにした。

「私が黒磐というものだ。さつきはこちらこそすまない。つい気を緩め過ぎていた。こうして会ったのも何かの縁だ、お昼を共にしないか？」

「ええ！そうだったのか…(確かに若いけど面影が濃いな)うーん。いぞ。だけどクレオとも一緒にいいですか？」

「敬語はいい。勿論だ、キツカケは彼のおかげだからな。」

「ありがとう！それじゃ呼んでくるから待つてな！」

壁が薄いと言うか何というか…でも、無礼というより芯の通った男ですよ、彼は……そんな真戸君の言葉を思い出した。

彼は上司の私に対しても何の忌憚なく意見を述べられる種の人間なのだろう。(＊脳みそまで筋肉に侵されているだけです)

理由は不明だが基本ヘルムで顔を隠しているせいで外見の威圧感が増しているのも勘違いされる一因だろう。

だが、上司に決しておもねらず、かつパートナーを大切にしていることはハッキリと私に伝わったぞ。

「すみません！お待たせしました…は、本当にいらしたんですね。黒磐上等…」

「うむ！」

「おおお、どこか嬉しそうで何よりですな。」

「こらこら、フレッド君…君はブレませんねえ…」

「いい。私はその方が好ましい。さあ、行こう！昼を食べられなくなるぞ。」

「ゴチニナリマス！」

「片言で言ってもダメだよ、フレッド君…すいません上等…」

「うむ！」

今度篠原も呼んでみよう。

彼も気にいるはずだ。

ゴリラと食災被害者上司三人組

最近職場の雰囲気がいい感じだ。

何が変わったかと言うとまずはヒトだな。

初対面で彼に何を与えてしまったのかわからないけど後輩の私に敬語な丸手斎一等。

今は階級的にはタメだがな！

あとはクレオとは変わらず、若い女性と実家が坊主の子と仲良くなれた。

やはり初対面では後ずさられたが直ぐに気軽に話しかけてもらえるようになった、嬉しいニコニコ。

名前はたしか女の子の方が安浦清子さん、坊主の子が：田中丸モーガン？感だったと思う。

モーガンて：直接聞いてみた所、彼曰くハーフではないらしい、カッコいい名前だなあ。

上司は：あまり変わらず、というか固定されてない感じだな。

強いて言うならば黒磐上等とそのお友達ということで良くご飯に連れてってくれるようになったヒトが二人。

黒磐上等とは、前会った時からよくご飯に誘ってもらえるようになる5回目くらいの折に少しお高めの店（居酒屋と高級レストランの間くらい）にお呼ばれした。

私とクレオとイワイワ（あだ名でイイ？と聞いたら「うむ。」だったので多分OK）でいつも通りかと思っていたらまだまだ若いのに階級が高く有名なお二人が来た、イワイワの同僚で篠原幸紀上等と瓜江幹人上等だと紹介された。

初めは半分接待くらいの雰囲気が出ていたが、最近食費がとある事情により貯金を始めたせいで追いつかなくなってきたいて常に空腹の私の腹の虫がなったのがキツカケとなり食事の話題で話が盛り上がり始めた。

それまでは各々のウエルカムドリンクと少ないのにやけに高い（が、美味しい）つまみを片手に粘っていたのだが、ボチボチ料理が頼ま

れだし、私の方にもメニューが回ってきた。

流石に今回はマズイだろうと、はじめて三人で食事した時の大惨事（お会計）を思い出し、冷や汗を垂らしていると。

「今日は俺たち（三人）の奢りだ！遠慮せずに頼めよ！」と篠原Ⅱサンが禁断の言葉を発したところで空腹が限界に近かった私がフードファイトに勤しみ始めたのは言うまでもない。

結果は…その日の食事は楽しかった、うん。
少なくとも私は大満足。

いつもの大衆酒場も好きだが高い分量は少なく何度も頼む羽目になったがその分味は確かだった。

仲良し上司三人組は仲良く財布を薄くした。

8割がた私の食べた分であったことは紛れもない事実なので言い訳はしない。

他人の金で買う飯は格別だったよツ!!?（開き直り）

クレオくんは凄く疲れた顔をしていたし、トリオもなんだか食前より痩せて見えたのは気のせいであって欲しいスマヌ。

まあ、これで私はしばらくの間侘しい食事確定なので悔いはない。そう思っていたのだが…なぜかこの前のメンバーでまた食事に行くことになった。

こ り な い や つ ら だ

まあ…ね。

貰えるものは貰えるだけ貰っちゃうよ?（動物園出身脳）

ふふふ、次の金曜が楽しみである。

そんなことをやたらとスペースだけ取って物がほぼほぼ置かれていないデスクの前のクソデカ特注チェアに座りながら考えているゴリラであった。

ゴリラの貯金と貧しい食事！（カイジ並感）

ことこと…ことことこと

炊飯器が買えずに苦肉の策としてホームセンターから買ってきた土鍋でご飯を炊いている。

何かこだわりが目覚めたとか、こつちの方が美味しいからとかいう高尚な理由などなく、単に金がないだけである。

ついでに言うとう惣菜だとか菓子パンだとか、少し前から細々と食費を削ってはきたもののそろそろヤバくなってきたので自炊にしたと言わうわけである。

ちくせう、味気ないなどは思いつつも私の自炊レベルでは白米にふりかけをかけるくらいしかできない為我慢である。

「あちち…って熱くないんだよなあ、なんとなくて口をついて出ちゃうだけなんだけどなあ…手の皮が厚過ぎで熱さをあんまり感じないってのも悪くないかもな…どれどれ、お、炊けてる炊けてる…よっ、よっ」と。

百均のやつすいしやもじで土鍋から豪快に湯気を立てながら白米を中華鍋によそっていく。

勢いで買って以来私の普段使いの茶碗の代わりを立派に努めている。

本来の用途に使ってやることは未来永劫ないと思うと申し訳ない気持ちでいっぱいである。

さて、なぜ私が朝からこんなことをしているのかと言うと、今日は土曜日だからである。

基本的に私は事務仕事ができない。

できないせいで仕事を割り振られることもないため、そもそも残業の必要が生まれないのである。

おかげで完全定時帰宅の匠、（残業）永遠のゼロである。

無論、残業手当もゼロである。

更に、まだだとは思われるがドイツの方で大規模なグール掃討が予定されるとかしないとからしい。

この調子だとまだまだ何年もかかりそうだとも考えたが、いざとなった時に飛行機が使えないとなると：日本海を泳いで渡った上でドイツまでモンゴル帝国の西洋制覇RTAになること間違いなしである。

正直言つて出来なくはないとも思う：だがしかしソレとコレとは別問題である。

是非ともソーセージとカリーブルストをつまみに本場のドイツビールと洒落込みたい所である。

つまり、グール案件ついでにドイツで観光を楽しみたいがために貯金をしていると言うわけである。

かちやかちや：かつかつかつ：

もぐもぐもぐ：

うううむ：それにしてもゴマ塩と海苔の佃煮は偉大である。

昨日の食事会の帰りに立ち寄ったスーパーで購入したのだが、やはりというか大正解であった。

たまにはコレくらいの贅沢をしたいと思いますと思いふりかけとはまた違う風味を探索した結果である。

ご飯に合うものはゴリラになったからと言って変わらないのだ。

ああ、ゴリラの体は丈夫で色々と優秀だが、中でも手が分厚くデカイその分手先が余り器用に動かせないのだ。

箸と鉛筆を始めて握った時、軽く力を込めればは弾けるようにして折れたものだ。

私は本当にゴリラなんだと改めて明確に晒された気がした。

職場では鉛筆は持たないようにしている：結果として事務も出来ない武力に逆振りの脳筋と化した。

箸に関してはクレオに相談したら檜の木を削り出した鉄棒より二回りくらい細い菜箸くらいの特注品を作ってくれた。

：君が相方で本当によかったよ、ありがとうクレオお陰で私は手掴みから抜け出せたよ。

もぐもぐもぐ：

…ごつくん！

ゲフウ：

おっと失礼。

しかしなあ、これじゃ昼前にはすぐに腹が減りそうである。

一升は食べた気がするのだが…本来何もなければこのゴリゴリボデーにはいい感じの量なのだが…私はゴリラミートを生成しなければならぬわけで。

今は、午前10時13分…ロマがお昼ご飯に私を齧りにくるまで大体2時間くらいあるな…午後3時には20区の今週の配達分を用意しなければならぬ。

毎日食べる必要がなく、さらに言えばいくつかに配達を分割していいとはいえ1週間の間にオンボロ冷蔵庫一杯のゴリラミートを用意するのも大変である。

…また上司三人組にご飯に連れて行ってもらえないかと期待してしまうな、いけないいけない。

よし！俺も悪質なグールの捕縛に精を出さなきゃな！

事務出来ないし！！

今日は俺たちの奢りだ！（死亡フラグ）

期待の新人

超大型新人

喰種捕縛数及び駆逐数の最速記録更新

人間離れしたの身体能力

グールをも凌駕する頑強な肉体

圧倒的な戦闘センス

などなど：さまざまな逸話が早くも氾濫しているフレッド二等：

今は昇進して早くも一等捜査官だったな。

そんな彼に友人の黒磐蔵が珍しく積極的に興味を持っている。

そのことに私は強く興味を惹かれた。

イワは決して感情の起伏が人並み以下なわけではない。

単に顔に心情が現れないだけなのだが、そのストイックで自己を磨き続ける高潔な性格から他人に意識を向ける機会が少ない為そう思われがちなのである。

そんな彼がいつもに比べてずっと楽しそうにその新人について話していたのである。

とても気になる：そんな風に思っている矢先。

とある週末明け、イワが少しばかり疲れた様子でしかし何処か楽しそうな空気をまとっている日があったのだ。

気になって彼に直接聞くと次のようなことがあったらしい。

「おはよう！なあイワ、今日は一段と楽しそうだな、どつか疲れてるようにも見えるけど：何か良いコトでもあったのか？」

「うむ、おはよう。：そうだな、確かにイイコトがあった。」

「おおおあのイワがイイコトと言い切るような出来事が：どんなことがあったか聞いてもいいか？最近今までにないくらい楽しそうだったからずっと気になってたんだ。」

「うむ、かまわない。先週末は早めに上がっただろうか？あの日の昼に偶然くだんのフレッド君に会うことができたんだ。それでこれも何かの縁だと思えば昼食と仕事終わりに居酒屋に行こうと誘ったんだ。」

「なるほど…しかし、それにしても嬉しそうだっただ。そんなにそのフレッド君はいい子だったのか？」

「うむ。いい子と言うのは変だが、芯のある立派な漢だと理解させられたよ。あと西洋人の如く親しみやすく、遠慮しなくていいと言えれば遠慮が無くなると言うことならばいい子と言えるかも知れん。面白い人物だったぞ。彼は大人物になりそうだ。噂以上に体も大きかったしな。うむ。」

「そ、そうか…それにしても、昼間も一緒に食べたのに夜も誘ったのか？本当に気に入ったんだな。ハハハ！珍しいこともあるもんだな！」

「う、うむ。夕餉も誘うつもりではあったのだが…事情が変わった故その日は昼間だけだったんだ。あの日早く帰ったのは妻に事情（財布の中身）を説明する為だったのだ。」

「えっ!??つ、妻に事情（浮気疑惑的な）を説明!??だ、大丈夫だったのか!??」

「うむ。大事なかった。貴方にもそんなことがあるのね、と許してくれた。」

「そ、そうかそうか。よかったよ。本当に。うん。」

よかったな…イワが浮気疑惑を生むなんてことがあろうとは本当に驚きだが、そんな疑惑を許してくれる奥さんの懐の深さにも驚きだな。

まあイワに限ってそんなことをするようには見えないしな。

うむ、それにしてもあのイワが会ってすぐさま食事に誘うほどご執心とは…是非とも会ってみたいな。

よし！食事のセッティングでも頼んでみるか！

ついでにウリも誘おう！（被害拡大確定）

「なあイワ！俺もフレッド君に会いたいんだが？食事に連れていく機会を作ってくれないか？」

「う、うむ。うむ。気持ちはよくわかるぞ。そ、そうだな、給料日の後ならいいぞ。うむ。彼と真戸君にも話しておくよ。うむ。…後悔しないか？」

ぷっ…めずらしいくな、こんなに焦ったイワは初めて見たぞ…？後悔？なんだろうな？まあ大丈夫だろう。（財布くんの死亡確定）
「ああ！勿論だ。ウリも呼ぼうと思ってるんだがいいか？」
「…うむ。そうだな。分割すべきだな。名案だ。」
「分割？…まあいい、それじゃ予定とかをすり合わせんとな！いや、楽しみだ！」

当日

イワ曰く（わざとではありません）彼らには俺たちのことは伝えてないらしい。

ふふふ、曲がりなりにも一応直属ではないとはいえ近場の管轄の上司に当たるからな。

どんなりアクションになるか楽しみだな！すまんなお二人さん。

お？きたきた…って、えええ！！？

「お、大きい、な。」

「あ、ああ…そうだなウリ。」

こつちが驚かされてしまった、残念。

向こうも少しは驚いているみたいだが、どちらかというとき真戸君の方がほんのり青ざめているみたいに見えるな…大丈夫か？

「ふ、フレッド君！…わかってますね！！？いけませんよ！今回は流石に！ね！ね！（小声）」

「マカセロ、ワタシ、イイコダヨー」

「…うう、君の言葉を信じるよ…。」

「うつうん！ウオツホン！」

…ここは先輩として威厳を出していかないとな！

「はっ！お初にお目にかかります。お噂はかねがね。私は真戸呉緒と申します。一等捜査官です。それでこちらの巨躯の彼が…「フレッド」と言うものです。一等捜査官になりたてホヤホヤです。よろしく！」
…デス。」

「うむ。二人は私の同僚で、気の良い君たちの先輩だと思ってくれていい。フレッド君は私に接するのと同じようにしてくれて構わない。

「……、じゃあ今度はフレッド君のオーダーだな。何を頼むんだい？」

ピシー……んっっ!!

なんだ?!? イワと真戸君の周りだけ緊張感が漂い始めたぞ?!?

い、イワも真戸君も……まるで凶悪なグールを前にしたときみたいだ……

「い、いやあ……私はまだいいかなあつて……あはは……」

「そう遠慮するな。折角の食事会なんだぞ。みんなで食べようじゃないか。」

「で、でもお……」

ウリが熱心に説得してるがどうやら断固として遠慮しているらしい……言葉遣いとは違ってずいぶん謙虚が極まってるなあ……俺たちの財布を気にしてるのか?!

ふふふ、舐められたもんだな……上等捜査官三人の解消を見せてやるぜ!

よし、ここは不安を払拭してやらんとな! (満面の笑み)

「今日は俺たちの奢りだ!」(死亡フラグの極み)

遠慮せずに頼んでくれ、そう言い終わると同時に悲劇は幕を開けた。

フレッド君はその巨軀に変わらずよく食べた。

……本当によく食べた。

ほんとうに……正に”竜”の如く……

頼まれては彼の胃袋に消え頼まれては胃袋に消えていった。アニメやマンガのように皿が積み重ねられている様は圧巻だった。流石のウリも表情がひきつっていた。

俺たちの中でイワだけそこまでフレッド君に料理のオーダーを強く勧めていなかったのを思い出した。

なるほど、納得だ。

135.000円

…よく食べるなー最近の子は。

どこか達観した感情と共に、なんだか悔しさが込み上げてきた三人組が懲りずにまた彼を食事に誘い財布ごと玉砕するのはまた別のハナシ。

俺はウリウリ

「ウリー！今度さ、例の新人とメシに行くんだけど一緒に来ないか？」
例の新人。

その言葉ですぐ様思い浮かぶのは一人しかいない。

この前入った安浦でも、田中丸でもない。

フレッド君、数ヶ月前に二等捜査官として突如として20区の局内に現れる。

喰種の駆逐及び捕縛において獅子奮迅の活躍を続けその存在感を示し始めた。

20区での突然の被害件数激減事件に伴い注目度が増し、大々的に本局より一等捜査官への昇進が認められる。

短期間での圧倒的な喰種捕縛及び駆逐数。

戦闘ログとパートナーの真戸呉緒一等捜査官による毎回のレポートから見られる現実離れした実力。

現在は姿をめぐりくらませた”白スーツ”の群との戦闘における、クインケを用いず素手でAレート以上を制圧するという史上類を見ない武力。

人間の範疇から逸脱したとしか思えない巨躯と頑強な肉体。

眉唾の話ばかりの例の新人。

いつもは頭を重厚なヘルムで覆い隠しているらしい。

偶然見かけた人による証言は特にその傾向にある。

それもそのはず、中には巨大なゴリラそのものだという捜査官もいるらしい。

…あってみるのもいいかもしれない。

気になって仕方がないと言うのも正直な所だ。

「ああ。俺も会ってみたいと思っっていたんだ。」

「お？ウリもか。だよな、気になるよな。あのイワが見たことないくらいワクワクしてたくらいだからな。」

「そうだな。俺もそんな感じだ。」

これからその新人がこの組織においてどんな役割を果たしていく

のか見極めるのも必要だろうからな。
それに、単純に楽しみというのものもある。

当日

で、デカいな…うん。

「で、デカいな、ウリ…。」

ああ、そうだな、うん。

なんなんだ、デカいとか言うレベルじゃないぞ。

物が違うと言う感じがする。

服もちろん大きいのが、その上からでも分かるくらい肉体の逞しさの主張がすごい。

筋肉の隆起がまじまじと服の上からわかる。

ここまでとは…確かに人間離れたた臂力にも納得してしまうな。

…それ、しても、なんて広い肩幅…丸太のような腕…大木の幹のような存在感だ…

もはや関心すら通り越して、感心やら感嘆やらしか胸に沸かないとは…

流石に驚きだな。

ハハハ…本当に面白い新人だな。

自己紹介も終わり、全く話が弾まない中でなんだか気まずい空気が漂っている…

ぐぐうううううううーキユウウルルルウウ

ぶはっ！

あ、アブナイ危ない。

危うく吹き出す所だった。

うん、そうだな、あんだだけ体が大きいんだもん！

そうだな、うん。

wwwwお、お腹が空きすぎて腹の虫が鳴るのも仕方ないよな…

はー、はー、はー…よかった。

顔の筋肉は動いていない、よかった。

いつもの俺の印象からかけ離れないようにしなければ。

：笑いのツボに入るととんでもないことになっていくなど人には
言えない。

ユキノリにもイワにも流石に言えんな、うん。

こんなにせかせかと胸中で焦っているなど知られたくない。

ふふは、この際彼ともっとお近づきになろう。

すでにとても面白い新人だが、これからの彼の活躍が気になって仕
方がない自分がいる。

どれどれ、空腹で腹の虫がなってしまう外見に似合わずお茶目な彼
に直々にオーダーを取ろう。

さあ、何がいい？

なんでもいいから、先輩の財布を借りるつもりでどンドン頼んでく
れ！

「今日は俺たちの奢りだ！……」

ふふふ、ユキノリもいいことを言うじゃないか！

さあ！どんとこい！！超大型新人！

若手の上等3人が相手だ！

それはそうと……イワの調子が振るわないようだが大丈夫だろうか
？

……ど、どんとききたなあ……うんうんうん。

そっか……おつきいもんな。

うん。

……ふふふは、はははは……

超大型新人は伊達じゃないと言うことか……

面白い！！

今回は痛い目をみたが、次は同じようにはいかんぞ！

なんだか日常的に感じているストレスが吹っ飛んだ気がするな。

アイツの、食欲にバカ正直で飾らずに自分をさらけ出してる感じが

接してる俺も気を負わなくていいから楽なんだろうな。

何かと疲れやら辛いことが多い仕事だが、がむしやらに走ってきた分自分は疲れてるんだと気付かなかったんだろうな。

今まで気を張ってたことが一気に溢れてきたみたいなのに、どつと疲れた気がする。

だが不愉快な疲れではないな、まるでいい汗をかいたみたい疲れだ。

疲れたのに辛くない、むしろスッキリしている自分がいる。

：あいつは動物みたいに無邪気な感じがするからな、アニマルセラピー（御名答）的な効果でもあるのか？

まあいい、今度会ったときにでも意識しておこう。

変わったやつだがむしろ気に入った。

次回が楽しみだ。

少し食べる量を自重して欲しいのも正直な所だがな。

つまらないものですが

「ふむふむ…いよしっ！」

通帳を見ながら声を上げてしまった。

家にいるのは私だけだが隣のロマは耳がいい。

やっつのである…苦節3ヶ月。

思い出したように貯金を始めて以来カイジ並みに食事が貧しいことも少なくなかったがやっつと旅費もとい観光費が貯まった。

はあ、この苦労をもう一度する必要があると思うと流石に気が滅入る。

「何はともあれがんばった！私！…こう言う時はしつかり自分にご褒美を与えなければな。うむ、最近の食事は特に感情が入り込む余地がなかったからな。はあくくココへ移住者が増えるとは…噂を聞きつけて来たらしいとはいってもなあ…」

ヤモリ曰くである。

”ココ20区ではヒトを殺さなければ何もしなくても食事に困らないらしい。”

というウワサがいつのまにか近隣の区に広まったらしい。

さらにさらにである！

相方のクレオがイワイワから教えてもらった情報によると、ここ20区への他区からのグールの出入りが激増しているらしい。

しかもその数や危険度の分類も広く、上も対処に困っているという。

おかげでウワサにすがってやって来た食うに困っているようなグールの中でも弱い部類に入っているものから、ウワサが事実ならそのウワサの基を牛耳り勢力拡大を狙う凶悪なグールや組織力に長けたグールの群れなんかが幾つか侵入したとのことだ。

率直に言って、うわあ…である。

そもそもは私が悪いのだから仕方がないだろうがな！

あ、それとさっきの話には続きがあったのだ。

クレオ氏の供述によると中でも凶悪なのと強力なのがそれぞれ

ハッキリしており、外見が明らかにヤバイやつと若いのにどつか渋いイケメンらしい。

……イヤな予感しかしないのだが…。
そんな時であった。

ピンポーン…

電池取り替えもしてないからか細かい音しか出ない我が家のチャイムが鳴ったのは。

「?…:ロマ、鍵は開いてるぞ。」

いつもならドアバーンというダイナミック入室しかしないロマにしては珍しくチャイムを鳴らしたので怪しんで声をかけて見る。

「ロマ。開いてるって。入ってこいよ、いつもより大分早いご来店だn…:っ、!??。」

ローそれじゃあ遠慮なくロー

そんな声が響いたかと思えばドアが吹き飛び、ナニカが一気に距離を詰めてきた。

せつまい玄関からまっすぐ狭い通路を通り抜けた所にある私の寝室兼リビング。

ここまで約5メートル。

そのナニカは瞬く間に私の目前に辿り着くと、吹き飛ばされた衝撃で私の目の前に横臥する羽目となったひしゃげたドアで土足を拭うと包みを私に差し出してきた。

ちようどいい座布団がなくフローリングの上に胡座をかいている私の目線と目前に佇む侵入者の目線は私が少し見上げるくらいであった。

ロマは胡座をかいた私よりも小さいのに…:などと下らない感慨を抱きながら意外にも冷静に状況の理解へ努めようとした時、侵入者が口を開いた。

「つまらないものですが。」

スルっ…

ゴロゴロ…こてん

” 私なんかにもどうも。”

鍵が開いていると言うのにドアをぶち壊して入ってくるようなヤツにさえお礼を言おうとしてしまいかけた私の目の前には…見知らぬ人間の頭部が三つほど転がっていた。

三者三様の苦痛を顔に張り付け、性別も年齢も推定がかなわないほどにうじゃじゃけている。

「…色々と聞きたいことはあるが、コレは何のつもりだ!?!?」

あまりの出来事に声を徐々に荒げてしまう。

この時まで私は今まで人死にはまだ会ったことがなかった。

グールの駆逐自体は経験があるが、多いとはいえども捕縛に比べれば少ない比率である。

命を奪うことに抵抗があるというのが大きい。

一方で今までそれほど怒りを感じるほどの出来事に遭遇していなかったと言うのが大きい。

私は運が良かったのだ、そう思った。

目の前の頭部に張り付いている、苦痛に歪んだ男とも女とも分からないほど崩れたヒトの顔を見るのは初めてだった。

ただ頭部だと言うことは分かったが、それ以上は今考えるべきではない。

これが何を意味しているのか、それが問題である。

「?…どう言うことって…そのままの意味だけだ。」

「これは何を意味しているのかと聞いているのだ!」

そもそも、このような真似を平然としかすような者は狂人かなにかの類いに思えてしまう。

そんな者に行動の意味を問うたところで無意味と分かっている私には問わざるを得なかった。

目の前の侵入者は暫しの逡巡のちに口を開いた。

「だからさっきも言ったけど…つまらないものですが。だよ。」

なんなんだこいつわあああああ!

ガチムチ肉体指導モードカツコガチ

ゴリラにはある悪癖があった。

それは存在そのものが理不尽であるために力技で物事を解決しがちな点である。

無論それに限らず悪癖というのはゴリラ以外の人間含めて往々にあるものである。

がしかしゴリラは理不尽にも普通ならそうならないことさえもねじ曲げてそうなるようにするだけの力を持っている。

彼は実際のところ年齢7歳のゴリラであるし、無意識下で体に精神が引つ張られることもまちまちであった。

そして、その引つ張られがちなものの中で最も悪い意味で大きな影響力を発揮するのが精神の不安定、つまり感情のコントロールが一时的に幼稚になり思考の大人びている状態と相まって酷い錯綜を生むことがあるのである。

ある意味で彼の行使できる武力との等価交換的な色合いもあり、謎は多い。

問題はコレが今まさに起こっていると言うことである。

しばしば仕事の外回りで武力を行使していたためにソコの楔が緩くなっていたそこへ唐突な侵入者、ドアがダイナミッククバイバイし、人の頭部（めっちゃグロ）を見たくもないのに見せられた。

理不尽への理不尽な反駁がこのゴリラの力そのものを象徴しているなかで、これらの事柄はすでにゆるゆるだったクレイジーガチムチゴリラへの楔が外れるのには十分過ぎたのである。

この侵入者にはゴリラによる圧倒的な理不尽の嵐が倍返しでプレゼント（強制）されるであろう。

そして、最大のゴリラによる理不尽は侵入者のキャラキャラとした格好と沢山のタトゥー、更には派手派手なピアスなどなどの外見に触発されお節介にも学級委員的な更生しなきやの精神に侵されてしまい、ゴリラがその通りに行動してしまう状態にあるということであろう。

チャライはゴリラにとって最悪の可燃剤であった。

「お父さんはそんな格好許しませんよ！いい加減に更生シナサイ!!」

…学級委員じゃなかったわ。

「…俺の父親じゃねえだろお前…」

つまりないもの発言以降ダンマリであった侵入者は親というワードに反応してついうっかり”反論”してしまった。

「さっきから訳のわからねえことをいいやがってえええ!!!ヤアアロオオオオぶつ更生してやあああるああああ!!!」

もはや災害である。

たまげたなあ。(諦観)

お前は父親じゃない発言から約二十数秒。

父親というよりもはやベネ○ツトである。

ついでに言うとな残念ながらゴリラの脳内の父親像は巨人の星よろしくの強権独裁であり反論した時点でイロイロと終わりである。(遠い目)

侵入者、可哀想にな…

わずかに俯いて体を震わせていたゴリラは理不尽な激情に染まった顔をやおら正面を見据えるようにあげた途端の大咆哮。

ここここに限り侵入者は無罪である。勝訴。

が、しかし理不尽にも反論を許す気のない自称父親は止まらない。

瞬間、その巨体が宙を雷光の如く突き抜けた。

目標物への愛の鉄拳制裁(笑)は特大の火球の如く終始苛烈を極める。

ゴリラ、お前いつ親になったんだよ…(困惑)

「さっきから礼儀のれの字もなっていない息子だ！お父さんがあ！肉体指導で品行方正に矯正してくれる！そんな子に育てた覚えはないぞ！」(*ゴリラは彼女すらいたことはありません)

ベゴおおおんっ！メギヤツツ!!

「!?…ツツうづ…!!」

全力による右腕の大振り

↓ピコンツ！対象の頸椎、顎、頭蓋骨の左側面に重篤な裂傷と粉碎

骨折!! さつそく決まったあああ!!? (実況は作者がお送りします)

「全く! 一体全体どう言うつもりだ! こんなに自分の体を傷つけて! 許せん許せん! 親からもらった体を大切にせず穴を開けたら物を埋め込むとはあ! これでもくらえええい!」(暴論を正論でコーティング)

クアンツツ! めこつべこべこべこつ

「シイツ……! フツぐうううう!!? ……フツ!! つつ!!? ……ガツつ!!?」

顎目掛けての左の返しの拳を赫子が出てきたことで戻すと、すぐ様に力が漲らせた脚による攻撃に移った。

顎から腹部を目標にとらえたゴリラは膝を突き刺す勢いで得意の突貫を見せた。

直撃。

体を覆い守るように展開された赫子は段ボール細工の如くしなじなど弱々しくひしやげた。

↓ピコンツ! おおお!! 顎に第二撃かと思いきや膝蹴りダアア!! あまりの衝撃に咄嗟に迎撃しようとした赫子がベコベコにひしやげました! どうやらドアの恨みは根深かったようです!

「うおおおおおおお! お前はそれでも私の子供のつもりかー! いい加減にしろ! その姿はどうしたのだ? ずいぶん血だらけだが…まさか?!? また喧嘩か? ユル”ザン!” (マジキチサイコパス発言)

ドガガガガガががが!!!
「うううだべばぶやむでざじぐぐぜげげうごごごぶべべ!!?!!?」

目にも止まらぬ速さで繰り出される鋼の如き拳が侵入者の意識と肉体そのものを文字どうり削り取っている。

黙々と時に咆哮を交えながらひたすらに目の前の存在に拳を叩き込む。

一撃一撃がグールと言えども巨大なハンマーにより体を打ち据えられたと感じるほどの破壊力が伴う凶悪な攻撃である。

日頃飄々としていそうなその若い侵入者はすっかりと苦悶の声を

堪えられないほど追い詰められてきていた。

↓ピコンッ！うわあ…ひたすらに超高速によりその以上のファイジカルを最大限活かすかのような拳による打撃を…ひたすら打ち込んでます。はい。コイツはひどい。全身ボロボロじゃあないか。

「くそう！なんでわかってくれないんだ!?？父はこんなにお前のことを思っていると言うのに…！愛が足りないってことか！なる程！俺の愛を受け取れい！」（哀が足りないんだよなあ）

めきよっ！どゴオっ！どかっ！どちっ！どぐんっ！

「づうっ！ぐぶえー！ぐおっ！………」

先ほどまで赫子によって辛うじて立っていたボロきれのような体はずでに限界を逸した状態にある。

すでに立ち上がる力も体を再生する時間もなく、ひたすらに拳を打ち付けられる肉の的に従事せざるを得なかった。

拳が見舞われるたびにビクっビクっとしなる肉塊である。

↓ピコン…（マジ引き）……うん。私には布団に人がくるまったくらいの大きさの肉塊をひたすら殴っているようにしか見えませんね。言えることは…うん、それだけ。

「……お、トウサン…かあ………」

しばらくして、散歩から帰ったロマがお隣の異変に気付いてゴリラ宅を訪れた。

ゴリラの変貌に驚くも、うろんの母に変形したことにより体格差を埋めて隙をついたことで取り押さえることに成功した。

侵入者は半壊した部屋の隅で無事に鎮座しているオンボロ冷蔵庫のタッパーからゴリラミートをロマが取り出して与え一命を取り留めた。

30分後、意識を取り戻したゴリラはロマからの説明と侵入者から教えられた衝撃の事実を頭を抱えていた。

「はあくごめんね！ワタシが説明ほつたらかして買物なんかに行つてたせいで…それはともかく、お互い色々誤解があったみたいだけど、無事で何よりだよ…アハハ…」

「ご、ごめん。いやそれだけじゃ済まされないのは理解してるんだけども！本当にすまない!!まさか、あの頭部がマネキンの頭にマスクを被せたものだとは思わなかったんだ!…ほ、ほんとうにスマナイ…うう。」

「……」

「ね、ねえウタク。こうしてゴリさんも本当に申し訳なく思ってるんだしさあ、ね?このことはお互い水に流して明日からお隣同士仲良くしようよ!ね!ゴリさんもそう思うよね?」

「お、おう!勿論だ!あつ、無論君が私に何を意図してあんなものを渡してきたのかは詮索しないよ!うん!」

「アンタがハトなのに面白い奴だつて聞いたから会いたいと思つて来たんだ。だけど、ここに住む前に一週間監視してる内は何にも面白くなかつた。…だから折角だし大胆に挑発してみたらどうなるかな?つて考えてあんなことしたんだよ。」

「へ?監視?挑発?面白い奴?…ろ、ま?」

「へあ?!あ、あああそういえばく久しぶりにウタと会つたせいで口が軽くなつてたかもなー、わーわーわー…ごご、ごめんなさい言っちゃいました。」

「…肉の配給のことは私にとつても喰種にとつても大切なことだから他の喰種に話してもいいけど、私とロマの仲がいいとか言う話はしないと約束した気がするのだが…ましてやハトだと言うことに関してはご法度なのだが…」

「ゴメンナサイ」

「はあーっ。まあよし。私に変になつたのは多分色々許せる範囲を逸脱してたんだろうな。うん。とにかく、ウタさん、本当に申し訳ありませんでしたー!!」

なぜあんなってしまったのか…ほんとうにこのカラダは益々謎

が深まるばかりだ。

「……いいよ。もう気にしてない。」

「むしろ、君が面白いヤツだったことがよくわかったよ。」

「それじゃ、これから宜しくねゴリ君。暴れてたらちやんと止めてくれると嬉しいな。」

「え？ウタ、おまちよ……あーいつちやったよ……ふむ、一先ず一件落着でいいのかな？よかったねゴリさんどうにかなって……ゴリさん？」

んん何か引つかかってら気がする。

許してもらえたのは何よりだけど……ピアスとタトウ……派手派手……ビジュアル系チックな見た目……強力な赫子（一応一撃をひしやげつつも受け止めているので）……そして暴れる……外からきた喰種……

「暴れる？……あ。」

あー、知ってるやつだわコレ。

しかもどおりでなあ、確かに派手派手やんちゃボーズな見た目だったけどまだ若いし、所々違ってたし、私は正気失ってたし……うん、特徴全部合致するね。

つまり、お隣さんのウタって……最近20区に入ってきたやつ凶悪な方ジャンジャンジャン……

空くまでもなく ウタ side

ウタは空いていた。

物心がつく頃から何かに激しく感情を揺さぶられることは無かった。

確かに食事の際の命を奪う感覚や戦闘、それこそ殺し合いのような命の遣り取りによる快樂は自身を高揚させる。

四方蓮示という好敵手ともいえる存在の出現に心躍らせることもあるが、それ以上ではない。

幼少よりウタという存在は冷たく社会へ臨んでいた。

彼が両親、親といった自らを守り、凡ゆる不安から覆い包んでくれるような存在を欲することは無かった。

知らないと言うことが齎す不幸の一つに数えられるべき事実を彼は背負っていた。

彼は断じて早くから狂騒に身を委ねるような存在として自己を確立していたわけではない。

幼き頃より終ぞ教えられることのなかった安穩の柵の内側の世界への憧憬を抱かなかったのである。

自身が捨て置かれている土に身を馴染ませるほか幼い彼の不安を払拭できる選択肢は無かったのだ。

生まれ落ちた場所で強くなった、彼の人生が放つ色はただそれだけである。

人間は様々な比較の上に今を生きている。

万の選択肢から千の選択をし百の結果から十の正解を求め一の幸福を追求するのである。

盾を持たずして産まれ落とされた彼には最初から半分を選択肢も与えられなかったのである。

彼は自身が生きるこの世そのものを乾いた味覚で味わうことしかできない。

自身が生命の初まりから背負わされている不条理は彼に狂騒によって気が紛れることを教導した。

彼はとにかく激しく自信を揺さぶってくれるものを求めた。

色欲、酒食、豪遊……およそ自身の思いつく刺激を堪能した彼には空しさと一つの心当たりが残るのみとなった。

死は生の表裏一体の概念である。

彼の心当たりは生死の境界に臥す絶対の概念であった。

死ぬことと生きていることは明確かつ絶対の摂理でありその有り様は何人から見ても一樣に同じである数少ないものだと言える。

皆一様に生きているのか死んでいるのかの二対の現実があるのみ。

精神と肉体の生死を互いに其の撞着から目を逸らし合っている滑稽。

淡々と燃える好奇心に身を焼かれながらヒトを殺めることで自身の命を奪おうと躍るピエロを笑った。

案外にも無邪気に生きることが苦痛であった。

轟々と自身の中で荒巻く寂しさには気づいていた、自分の求めるものが何なのかは嫌でも明確に自分に付き纏う。

しかし望んでも望んだものが得られない苦しみに耐えられるほどに彼の本性は冷たくなかったのである。

冷たい血に身を浸し方時の狂騒に耽ることで自らの夢想から目を逸らし続ける。

自分の今の有様に凍え、水面に自分が映らぬように更なる高揚でかき混ぜ続けてきた。

ウタは狂うことに疲れていた。

今となつては過去の夢想も擦れて、これからの長い生涯に映える面白味を探すばかりとなった。

がむしやらに争い、殺し、遊んだ。

その間に出会ったロマやニコという似た存在と互いのあり方の歪さ、滑稽さを笑い合う歪んでいるが確かに友人と言える存在もできた。

今を空いている彼にとっては、共にいると穏やかに時間を過ごせる稀有な存在だった。

そんなロマの様子が変である。

恋でもしたのかと茶化せばいつもはヘラヘラと空い笑い声を響かせるのだが、その日は違った。

「お、面白いヤツにあつたんだよねえ。そのさ、なんていうか本当に不思議なヤツなんだよ。ゴリさん……って言うんだけどね。」

何度思い出してもまさに想い人への懸想を親しいものに明かす時のような甘くて温い空気をまとって彼女の姿には驚かされる。

その時も大いに驚いて変な声をあげたが、それはロマの隣のバーカウンターの椅子にしつくりと収まっていたニコも同様らしい。

最近はどうにもこうにもヤモリの付き合いが悪いらしく何処となく不機嫌だった彼女もこの話には興味津々だった。

「え、えくでもなあ……悪いヒトと悪いグールには言っちゃダメだつてゴリさんと約束しちやつたしなあ。」

二人で根掘り葉掘り聞き出そうとする彼女は何度も泳がせながら、免罪符のようにニコもウタも友達だから大丈夫大丈夫などと呟きながら話し始めた。

「うくん、そうなんだよおー。でもさくハトなんだつて。私と初めて会うきつかけだつて20区の喰種を完全するために本部から寄越されたからつて言つてたし。」

「そうそうー！ そうなんだよ！ 何がいつてねえ、いつもは隠してる顔が実はすんごい男前なことか。あとはあとは、やっぱりあのでっかい体に見合うような優しい所かな……」

突然黙りこくってしまった彼女の様子になり声をかけようとする、

「初めて会つたときね、負けたの。それで私死ぬんだくつて思つたんだけど……突然お金を渡されてね、お腹が減ってるからご飯を買つてきてつて言つたの。……グールの私に態々だよ。ふふふつ今思い出しでもオカシイよね……でもさ、私はなんだか諦めの境地？ 的な何かでさ、それにあんまり変な奴だったから圧倒されちゃつてね、私もあろう者が従順に従つてしまいましたよムハハ……」

それでそれで、そんなふうになニコと声を合わせて話の続きを急かした。

今は聞かなきゃ、そんな感情に支配されてるみたいにロマの声帯の震え以外そのときの僕には何も響かなかった。

開けて居る ウタ side

ロマに教えてもらった住所に来た。

確かに中からは強烈な気配を感じる。

高鳴る胸に気づかないフリをして自分の歪さに引き攣る顔にマスクを張り付けた。

ロマは言っていた。

「うーん。確かにね、本当に変なやつだよ。ヘンなやつだよ。」

「ふふふ、私のお隣さんのだくぶぶっ！毎日起こしてくれて普通頼むかなく？だってワタシグールだよ、しかも治ってたけどお腹にあなポコ開けちったし。ほんつと変な奴だよ！」

…だけど、一緒にいるととっても楽しいよ……

控えめに言って心底穏やかな笑顔だった。

僕が知ってるような笑顔じゃない。

冷たかったり、いやらしかったり、艶やかだったり、粘り気を帯びていたり…色んな笑顔があったけど、どれも違った。

その時の羨ましい気持ちを抱いたまま今日になってしまった。

…多分、本当に違うんだろうなあ。

なんともまとまりのつかない不甲斐ない言葉しか浮かばなかったけど、自分がロマの言うゴリさんに会っても多分…違うんだと思う。僕は穏やかさが得られない。

ロマみたいに接してもらえたとしてそれは同じだと分かっているんだ。

構ってほしい、遊んでよ、そんな感情は蓮示くんにも抱くものだけだ。

ロマの笑顔を通して感じたゴリさんに対しての感情はもつと深い何かを切り離せないでいる、離してはいけないうって言ってる。

僕は自分を表すことが得意だ、芸術なんかはその最もな所だと思う。う。

僕はゴリさんの部屋を訪ねることをやめた。

これから一週間、蓮示くんに会わずに、誰にも会わずにいよう。

ただ彼を観察しよう。

そして一週間が過ぎたら僕を彼に表してみよう。

これ以上自分の生命が自然の脈から拒絶されるのが怖くてそう言い訳をして一週間も勇気を洩った。

最初からわかつているんだ。

僕がロマの笑顔を通してゴリさんに求めるものは明白だった。

僕は甘えたい。

一週間が経ってしまった。

ロマに紹介されるのは嫌だった。

期待が裏切られたから。

僕はずっと彼のことを見ていたが特に面白いとも思わなかった。

確かに変わっていたけど、それだけだった。

僕を感じた強い強い衝動は何だったんだろう。

それでも諦め切れない気持ちがあつて、それで今彼の家のドアの前にいる。

これ以上水面の自分を見ないままでいることのほうが嫌だった。

結局のところ逃げて逃げて散々置いてきたものだけど、捨てることはできないんだ。

僕は彼の家のベルを鳴らした。

彼の声は観察していた時とは全く違う雰囲気を感じていた。

心なしか弾んでいるようだった。

一週間ずつと僕は頭の中で一番彼に甘えられることを考えていた。

ヒトの頭部をズタズタにした悪趣味なマスクを三つ作った。

いつもなら絶対に作らない代物だ。

それをマネキンの頭にかぶせて髪を模した部分を掴み上げて彼の返事を待っていた。

ロマとの穏やかな生活をひしひしと感じさせる言葉が僕に投げかけられる。

僕はドアを蹴破って彼に肉薄した。

彼は心底驚いたようだった。

実物はずっと大きかったし、何よりずっと頼もしかった。

気取ってセリフを言い放ち、手荒に三つの餌を撒いた。

目を見開いた彼の顔は困惑、怒り、驚愕：鮮やかな感情に彩られていた。

美しいとは思わなかった。

でも蓮示くんと遊びよりもずっとチリチリと身が焼けつく興奮を覚えた。

彼の怒りがあったという事実にはとても満足している。

怒って欲しい。

案の定、彼は怒った。

僕の父親だとか言い出した時はびっくりしすぎて俺なんて言ってしまった。

あんまりにも変なヤツだった。

変だとは思ってたけどこれはあんまり過ぎる。

蓮示くんと遊ぶときよりずっと興奮してたし、今まで感じたことが無いくらいの圧を感じた。

生まれて初めて自分の身体全部で必死に抵抗した。

怖いわけがなくて、とにかくたまらなかつた。

体が今までにぐちゃぐちゃにされて意識は坂を下るヘドロのように床を滑っている。

僕に向かって拳を振り上げては降ろして僕の根本を揺さぶってくる。

興奮よりも心地良さ、不安よりも熱望、後悔より身を焼く渴き。

僕は僕の中で何かが弾けていることを悟られぬように彼から与えられる身の痛みを噛みしめた。

ロマから彼の肉らしいものを貰い、体を修復する。

彼は意識を失して寝ている。

僕は自分が彼から与えてもらえぬものがどれだけ甘美なのかを忘れないようにと生まれて初めて何かに願った。

痛いのが好きなわけじゃない。

彼から向けられた温度は怒りや困惑もあつたけど、お節介や温もりを包含していた。

その感情は真心というやつなのかもしれないし、違うのかもしれないけどどうでもいいことだった。

僕にとって彼は特別な存在なんだと思つたことが心地よかつた。

今はそれを肴に水面の自分を眺めていられる気がした。

水面の前、僕の隣にいてくれるのは彼自身じゃないけど、彼から貰つたものだと言うことは疑いようもなく自明だった。

生まれて初めて甘えることができたんだ。

生まれて初めて誰かが叱ってくれたんだ。

ダメなんだぞ。

かかつてこい、受け止めてやる。

水面の中でずっと待っていたのだろう。

いつもの僕は笑つていたと思う。

形は関係なくて、僕を見て、僕を思つて、彼は僕を打ちのめした。

あんな理不尽そのものの力を初めて味わつた。

決して自分の身勝手な事情に縛られているわけでもない、純粹に僕を映して放たれた拳はすごく痛かつた。

もつと甘えたかつた。

彼は僕が去る時まで謝つたばかりだった。

いつもの彼は穏やかで頼り甲斐があるのだろう。

僕はそんな彼の自然な姿を見れたことに心が温くなつたが、底冷えするような欲求に襲われた。

僕を貴方に今一度甘えさせて欲しい。

そう言外の想いを滲ませて去り際に彼に僕は悪い子だと伝えた。

暴れたら叱ってくれるかな？

甘えてもいいんだよ？（脳筋）

ウタとはあの後3日間全く会わなかった。

すまないことをしたからなあ、なんというか無邪気なんだとは思うんだけど、外見といい、大人になってからしちゃうとシヤレになつてないからなあ。

まあいい、過ぎたことだ。

問題はアイツの言う暴れる発言だな。

いつ、どこで、何をするのかわからないのは痛い。

クレオにも詳細は省きつつ近くに凶悪なグールらしき存在を確認した。的確なことを相談したしな。

アレが良かったのかはまだわからないけど、分かったことがあれば教えてくれることだろう。

それにしても…。

私はロマがああ後すぐに説明してくれたことを思い出した。

自分と似た境遇のグールは多いと言うこと。

彼はその中でも強力な個体の一人であり、自分にとって悪友のような存在だと言うこと。

あつ、私はゴリさんがお隣に来てからは一切ヒトを食べてないからね！

そう私に言い含めた彼女は愛らしかったことは置いておいて。

彼はロマと似ていると言うことらしい。

ロマに関して言えばもう結構親しくなつたように思う。

親しくと言うよりは親密に届くかもしれない。

ロマからは何というか若干の私への依存の傾向を感じていると言うのが正直な所だ。

お隣さんになり毎日彼女に起こしてもらい、自分の肉を与へる生活をして1週間が経つた頃にはぼんやりとそんなことを感じていた。

私が彼女に会わない日はなく、また彼女も私を起こしたりするとき以外でも頻繁に私の部屋に入り浸るようになった。

彼女はこの前ヤモリの白スーツ組に突入された時に窓ガラスやら

がめちやくちやに散乱している元の部屋から移動して、一つ私の部屋から離れた所に居を移した。

基本的に私が休みの日は彼女と過ごすのだ。

最近は一入暮らしてしかも料理も下手な自分とグールでヒトの味覚はわからない彼女とで毎日料理の練習をしたりしている。

そんな彼女が私の部屋にいないというのはほぼ無いだろう。

特に休日は大半を部屋の中で過ごすのだから、彼女が居ない時に偶然客の訪問があるとは考えにくい、というかそもそも客人などいるはずもない。

職場にも住所を教えてはおらず、クレオやイワイワにも誤魔化している内容である。

おそらく彼は私の住所についてはロマから聞いていたのだろう。がしかしそれでも謎なのは最後の発言である。

彼がもしも、あくまで真面目に遊び心を添えてここの新しい住人として近所に挨拶しなきゃ的の思いを持ち合わせており、かつそれが盛大に滑ってしまったことが今回の一件の正体だとして、彼はどのように私に暴れるからなんて言うのか。

いや、自分で言うんだったら止まっていてくれますか？

自覚している上でも暴れたい。

どうしてなのか、ゴリラの私にはわかりかねる。

ロマのことを思う。

彼女と似た境遇だという彼、彼がどんな生涯を送ってきているのか、何を思っているのかははつきり言ってさっぱりだ。

けれど確かに私に暴れると言ったのだ。

私に言うのには意味があるはずである。

彼は既に私と拳を交わしている、実力差は実際に痛い目を見て理解したはずだ。

……構ってほしい、そんな感じなのかな。

私はゴリラだし、それらしいことを思いつくのは構ってほしいくらいに限界だ。

彼らは社会から打ち捨てられたのだから、認めてもらえなかっただろうし、見てもらえることも無かったのだろう。

特に男の子は本来お父さんを最初のライバルにして育つという。初めて出会う同性の気を許せる相手であるべき存在を彼も知らずに育つたのかもしれない。

兄弟もいないようであるし、彼が孤独を感じていることは確かかなのだろう。

私は過去に孤独を強いられることもなく、コチラでも隣人に恵まれている。

私にはわからないことばかりである、私は恵まれた生を生きてきたのだと改めて感じた。

知らなくていいことなのだろうな…

彼はどうしようも無かったのだろう、もしかしたらあのマネキンの生首だって私へなにかを意図して渡したのかもしれない。

私は彼でないので分からないが…何か求めていたんだろうな。

私の目からは決して狂人というものに限ってしまえるようには思えなかった。

彼の苦悩も思考も理解はできないことだろう。

：私にできることは彼の言う暴れる発言を真に受けて受け止める心構えをしておくくらいだと思うのだ。

形は違えど彼の思いを受け止めるべきだと思った。

彼を理不尽に拒絶することは可能であるが、それは何か違うと思う。

頭の中は思考と疑問と矛盾でないまぜになっている。

仕事終わりの疲れも相まり余計思考はまとまらず、もう一思いに眠ろうと思った。

その時である、大きな爆発音が鼓膜を打ったのは。

着の身着のままヘルムだけ頭に被せて家を飛び出した。

部屋が先日の出来事でためたためたになっていたためロマの部屋で寝泊りさせてもらっていたのだが（強制）彼女は今珍しく部屋には居な

かった。

心配ではなかったが疑問には思っていた。

しかし今まさに心情は心配に変わった。

未だに音が鳴り響く方向へ人工灯ばかりが煌めく都会の街の中を駆け抜ける。

徐々に人の流れが生まれているのが見えた。

それらの多くはホストやキャバクラ嬢然としたヒトや仕事帰りなのか酔ったサラリーマン姿の男なんかであり、繁華街付近からの避難であることがわかった。

人々はざわめきながら私とは正反対の方向へ流れようと必死になっっている。

一人捕まえて聞いたが要領を得ず、要するにグールが出たらしい。

20区は基本的にグールに襲われる危険が1区並みに低いと言われるようになった。

私や白スーツの努力の賜物であると思うと鼻が高いが、昨今は外部勢力の侵入によつてその平穏は許されないようになってきている。

日夜白スーツ達とゴリラミートの配給に伴ってできた人脈を張り巡らせ区のグールのナワバリ……と言っても不干渉地帯的な意味合いしか今となつては無いが……を管理、割り振りをし、外部勢力に対しての牽制とココのルールへの順応を迫ってきた。

先頭になれば捜査官として立ち回ったりヤモリ達に任せたりしてきたが、今回ののはそれどころではなさそうである。

たどり着いた現場は繁華街に近くすでにネオンが明るい、住宅地やらがここをCCGの局から切り離しており到着には時間がかかりそうな場所である。

所々の店舗がシャッターごと貫かれたり崩れたり、はたまた貸しビルが倒壊していたりとひどい有様である。

地面には硬質な赫子によつて抉り出されたのか、コンクリートや煉瓦で舗装されていたところが土を曝け出されている。

未だに消えない戦闘音に近づくとそれが見えてきた。

案の定ココの管理者を任せている白スーツが見え、相対しているのはチンピラ風やヤクザ風なヒト、マスクを顔に被せて赫子を揺らすグルールの様である。

数は当方が今さつき空から降ってきたヤモリと白スーツを含めて約25。

相手方はヒトに思しきが30人強、マスク姿のグルールと思しきが約40の計70。

戦力比較に勤しんでいると向こう側から明らかに纏う空気が男が人垣から顔を覗かせた。

ウタだ。

何となく分かる。

：そうか、今日だと言うわけか。

そうこうしているうちに戦闘が始まった。

向こうの目的はわからないが、おそらくウタは個人での参加なのだろうと推測する。

これらは予め日時が定められており、母体となるまとまった組織による攻撃が今日に指定されたのが今日だったのだろう。

それに伴い一枚噛むことを目的とした混ざりものが多いのはその為だろう。

直前に用意したにしては頭数が多いし拳銃やダンビラが得物のヒトもおり反社会的組織も今まで準備して来たと思われる。

：目的はグルールの協力による人身売買とかかな？

全く、迷惑なことである。

加えて今日を選んだ理由も明白だ、今日は私の相方も含めて多くの20区の局所属の数人の捜査官が本局にて他区の現状確認のための会議とか何とかに出席しており、日を跨いで不在である。

元々本局で勤めていた丸手君や篠原Ⅱサンも呼ばれているために不在である。

クレオは一気に捜査官が減ることを不安に思っていたが彼の言う通りになったと言うわけだ。

…………まどろっこしいな。

ナキじゃないが言わせてもらおうと、難しいことになったんじゃねえよ！

もっとわかりやすくしやがれ！である。

怒りに任せていつも通り突進をかます。

ヒトもグールも関係なく30メートル直線上にいた奴らをなぎ倒す。

私は反社会勢力も許す気などない。

慈悲はない、とばかりに拳を、脚を、額を、膝を、肘を躍動させる。

2メートル50を遥かに超えた全身筋肉の塊のような肉体から猛打を放ち続ける。

白スーツのヤモリたちは勝手知ったる光景だとは思いつつも一歩引いた位置で黙々と私の打ち残しを狩っているようだ。

ヒトも死なない程度に痛めつけているようで感心感心。

私の方はそれほど器用ではないのだが、コイツラならかまわんだらう？ニチャ

なんてな。

赫子と弾丸と鉄の刃が迫ってくるが、銃弾はそのまま受けても豆ぶつけられる程度であり、鉄の刃は痛くはないが何とつか不快なので抜身を握って持ち主ごと投げ飛ばすか硬い地面に叩きつける。

赫子は言わずもがな純暴力によって対処である。

甲赫は拳か蹴りでブチ抜き、持ち主を二つに割る。

一撃でダメならヤモリ達にパスするが、たまにいる比較的強力な個体は刮いだコンビーフ缶みたいになるまで引きちぎっては捨ててを繰り返し戦闘不能に追い込んでいく。

尾赫は其のものを掴んで手元に手繰り寄せてから赫包ごと引き摺り出してKO、ビクツビクツとするだけになるので放置である。

一応死んではない…と、思う。

羽赫は基本的に真正面から突っ込んでドン！おしまいである。

顔を右手と左手で全力で挟み込む。

両手でパアアアアンの奴である。

これで頭部が吹き飛んだ瞬間に背中から赫子を筆り取って文字通

り一鳥：いつちよう：上がりである。

私を見ていて恐れをなしたのか？

段々と私に向かってくるやつは減り、白スーツ組の方へ人数が偏ってきた。

さつきまで四十人は私を囲んでいたが、ヒトとグルあわせて三十に届いたくらいで白スーツに流れていったようだ。

最初に突出した私の背後が主戦場となっているので振り返ると案の定もはや人数差は問題外である。

最近は特に外部勢力との小競り合いが多く、以前以上に戦闘経験を積んだヤモリ一門は他区のグルを物ともせず駆逐している。

特にヤモリは目覚しく戦闘センスに磨きが掛かっており、まだまだ若い今から成長を続ければSSレートになるかもしれないな。

私も挟み撃ちの形で掃討に参加しようと思った時。
ザツと先程顔を覗かせていこう沈黙していたウタが動いた。

戦闘モードに最初から入っているウタは以前とは比べものにならないほど私に喰らい付いてくる。

拳による殴打や刺突にも柔軟に赫子を操作して受け止める様はこれまでで最高レベルの捌き上手と言える。

ロマやらヤモリの力技のゴリ押しだとか以上の回避能力には驚いた。

案外繊細なんだとか考えつつも左足からの回し蹴りを避けられたところで、ウタの赫子が私の体を掠めた。

小さな切り傷だったが久しぶりに負傷を負ったことに驚きを隠せない。

ふふふ、ウタはテクニシャンという訳だな。

大抵の戦闘を数秒から数分で終える私としては少し楽しくなってきた時だった。

顔にクスリとした微笑を浮かべてしまったのはヘルム越しにもウタに伝わっていたようだ。

ウタはどこか不機嫌そうに「へえ…」と呟いた。

「フレッド一等!!」そんな声が突如として戦場に響いた。

水をさした犯人は最近知り合った捜査官の安浦清子ちゃんだった。モーガン君は今日いなかったと思うので、背後のおそろいコートを着た人だから見受けるに今日の居残り組を集めて来たのだろう。私は驚き半分疑問半分であったが、そばに駆け寄ってきた彼女の次の言葉に納得する。

「小さな女の子が通報してくれたんですよ。沢山のグループが現れて暴れているから助けてほしいって。」

…その子とは会ったかい？

「いいえ、疑って誰も出たがらなかったんですけど間もなくオバQみたいなのが暴れてるって別の通報が相次いで…電話の声も緊迫していたので向かったらすでにその場からいなくなっており、変わりに大きな戦闘音が聞こえたのでここまで来れば最初の通報の通りだったと言うわけです。」

…ロマじゃあん。

お前は何をやっとするか、そう思ったが確かに大物グループ？らしい彼女にできる形で私を助けてくれたのかもしれない。

じゃああとよろしく、そう言おうとした直後に一旦距離を置いていてウタが急接近してきた。

狙いは清子ちゃんらしい、女の子を狙うとはけしからん。

反応できていない彼女の前に陣取って近場の道路標識を引っっこ抜いてホームラン！と叫びながらこちらに突き出される赫子にフルスイングしてやった。

ゴガツ！と音を出して赫子の先端とともに標識も半ば程から弾け飛んだちなみに標識は減速つぽかった。

清子ちゃんは色々びっくりして固まってたけどここは任せてと決め台詞を言い捨ててみるとクインケ片手に白スーツに替わる形で入ってきたヒトとグループとハトの戦闘に混ざっていった。

あの子は特に優秀なんだなあ、そんな感想を抱く華麗な戦い様だ。気を取り直して正面を向くと、目の前まで来ていたウタがやおら顔を真近まで近づけてきた。

女を狙ったんだから怒ってよ。

端的に言ってそんな内容だったと思う。

ウキウキしているような、楽しみをお預けにされているようなそんな空気が漏れ出ていた。

DMかよ…（困惑）。怒ったら大変なことになるぞ？主に君のカラダが。

そんなふうに戻すとウタは満面の笑みで「来て」と言って腕を大きく広げた。

よくわからんが私のせいで特殊性癖に目覚めたのかもしれない。

個人的になんだか悪いチャラ男じゃないと思う彼を痛めつけたくはないのだが、頼まれたからにはコレも受け止めるべきだろう。

拳を握り直して、おおおおオオオオと徐々にボルテージを上げて殴りかかる。

闘魂カウンセラー

ウタという男に大きな影響を与えたことなど知りたくない。
はたまたお隣さんに強く想われていることなど露知らず。

あくまでも腕と足を動かしていく。

上段下段や型、美しさなど知ったこっちゃないといった荒々しい力
任せの打撃。

それを持ち前の戦闘センスで淡々と、寸でのところで捌き切るウ
タ。

風を切る剛腕としなる鉄骨のような足が襲う。

ガンガンという硬質な音と共に、コンクリートブロックで舗装され
た道路や鉄筋入りのビルディングの壁に巨大な爪の走ったような跡
が刻まれていく。

何処までも何処までも、ひたすらに続くかに思われたそれは突然に
終わりを告げる。

それまでは淡々と捌いていたウタが自ら前へと出たのだ。

豆腐に指が吸い込まれるように、ゴリラの拳がウタの胴を貫通し
た。

血を吹き出しているのが彼の自作のマスク越しにもわかる。

徐々に血が染み込ん赤くなるマスクの口元。

ウタがニヤリと笑った気がした。

やった。

やっと君に触れた。

やっと僕に触れてくれた。

あったかいな。

君にしてもらおうとつても痛いんだね。

やっぱり君は特別なんだ。

ブツブツと止めどなく溢れ出る言葉が、彼が自身に何らかの執着を
抱いていたことを証明していた。

それと同時に、どこか壊れたような危うさを感じた。
冷や汗が垂れそうになるがあくまでも鷹揚に、体の向こうから自身の腕を引き抜いた。

いや、引き抜こうとしたところでその歩みは止まった。

ウタが強く腕を抱きしめていた。

貫かれた胴より上を無理やりにねじって。

ゴリラの腕にしがみついた。

何処までも以上で無様だが、何処か恍惚と色を醸すのは気のせい
か。

割れたマスクから目元が見えた、ウタは優しくあどけない笑みを浮かべていた。

ニタリ。

だーめ。

いかないでよ。

まだ君を感じていたい。

口の中が自分の血でいっぱいなのに苦しくないんだ。

今は違うものに溺れているからね。

漂うのは心地いいんだ。

今までに感じたことのない強い寒気から、身をのけぞらせるようにして勢いをつける。

力任せに腕を引き抜き距離を取った。

目の前の男の様子はまだ色気だった紅い頬と、それを飾る白粉の様に澄んだ白いマスク姿のままだ。

いや、どうして頬の色を思ったのか。

まるで自分に伝えたいが為に彼の体から立ち込める雰囲気かそう思わせたのかもしれない。

仕切り直しだ。

ゴリラの一言でウタのそれまでの雰囲気は霧散した。気づけば目の前に迫るほどの勢いを纏って。

寧ろ喜しそうに、そうまるで音楽ショーのアンコールを聴けることを喜ぶように向かってきた。

先ほどにも勝るほど、今できる全力で持つてゴリラは応戦する。すでに三棟のビルディングを破りながら戦闘区域を広げる有様だ。ゴリラは少しずつ逃げるように距離を取っては戦う。

そうするほど、今までにない強い執念に突き動かされるようにウタは食らいつく。

強烈な拳が顔面に見舞われる。

直撃、金属が碎ける様な甲高い音が鳴る。

マスクは飛び散り顔は半分弾け飛んでいた。

グールですら戦闘不能に陥りかねない強撃が炸裂。

さらに足を真横から本気で振るう。

ウタの胸板の下辺りから上が消し飛ぶようにして圧壊した。

ウタは数回体を震わせた後に酔っ払いのようによろけて倒れた。

少し気が抜けたゴリラの体は浮遊間に見舞われた。

グルグルと目まぐるしく脈動するウタの赫子が自分の体全体を締め付けていた。

離すまいと恐ろしいほどの圧が加わり、未だ感じたことのない息苦しさに流石のゴリラも唸った。

ミシミシという赫子の収縮ともゴリラの骨の軋みともわからない音が大音量で周囲へ響く。

視線を感じた。

ゴリラは俯けていた顔をゆっくりと上に向けた。

マスクがとれた素顔のウタが、立てられた土管に入っているような状態の自分を見下ろしていた。

に・が・さ・な・い・よ

見せ付けるように、教え込むように。
ゆつくりだがハツキリと口を動かして見せた。

歓喜がにじむその顔には嫌でも苦笑いが生まれるほどだ。

軋む音を他所に全身に力を込めて押し返そうとするゴリラ。

死にはしないだろうが流石に苦しさはあるし、はじめてのピンチともいえる。

しかし、ゴリラはあくまで確実にウタを伸す気である。

ふんっ。

そんな場違いに優しい力み声が響くとともにウタの赫子の一部が喰いちぎられた。

アタシのお隣さんに！

な〜くにいしとるかっー！！

ほんわかしているものの怒りがありありと表現されているそれは、ハトを読んでくれたゴリラの可愛い隣人の声に違いなかった。

ジャマはよくないと思うな。

一言珍しいほどに感情の起伏が無い声で冷たく返したウタ。

ゴリラは自力で残りの赫子の拘束を解きようやく抜け出すと、ロマの元へと駆け寄った。

ニコニコ顔からすぐさま頬を膨らませて心配させた事を怒っているらしい。

こんな時に悠長な、そう思うほどにやけにじつくりと自分たちのやりとりをウタに見せるロマ。

妬ましそうに、羨ましそうにウタは顔を歪めて見せた。

やっと終わったのかと思えば休むことなく戦闘が再開された。

苛烈さや厳しさを含んだウタの攻撃はキレよりも刺々しさを感じる。

天賦の才能に胡座をかくように戦うのが常であったロマには鮮やかさが垣間見えた。

ゴリラだけが変わらなく、どこまでも鋭く強靱な打撃を繰り返し続

けた。

15分も過ぎようとしたころ、ハトの一団がゴリラに相對していたウタの後方から向かってくるのが見えた。

どうやら他の連中は片付いたらしい。

こちらも終いにするか。

ボソリと呟きゴリラは地を蹴った。

丸つきり目的が変わったように新鮮な体捌きでウタを追い詰めていく。

捕まえた。

ウタの耳にやけに優しくその声は聞こえた。

ロマを10メートル近く置き去りにして、ゴリラが肉薄した。

腕を掴まれたかと思えば引き寄せられた。

驚いて目を開いた。

抱きしめられたのだ。

骨が軋むくらいに、涙が出るくらいに強い自身を包み込むような抱擁。

ウタは柄にもなく狼狽えて声を上げて手足を動かした。

ミチリと腕が握り締められてウタの耳元に男の口が寄せられた。

十分遊んだろ。

お前のことはよくわからん。

だけど、どこか寂しいのはよく分かった。

今度はもっと人様に迷惑をかけないようにしろよ。

そしたらまた遊んでやる。

頭で内容を咀嚼した。

えっ…。

ウタから辛うじて出た声はそれだけ。

間の抜けた顔を晒してしまった。

でも、今回はオイタが過ぎたぞ。

男はそういうと体をひと回り大きくした。

まっ……！

又会おう！

男の異変か気づいたウタは疑問を訊こうとした。

待って！

どうして受け止めてくれるの？

本当にまた遊んでくれるの？

そんな幼く育った疑問がゴリラへ問いかけられる前にウタの世界は景色が変わった。

又会おう！という声とともにゴリラの全力によって投げ飛ばされたのだ。

絶対的な膂力は重力を正面からタコ殴りにして、ウタを東京の空の彼方に投げ飛ばした。

今日記録された人間投げの世界記録は永久に更新されないことだろう。

負けちゃったな。

でも…また遊んでくれるんだね。

人知を超えた大いなる力によって東京の空を滑空する羽目になったウタはポツリとそう漏らした。

君臨するし統治するし

あの後からウタが危険な雰囲気を放つことは無かった。それどころか家が本格的に隣の部屋になっている。

お隣さんが増えた様で何よりだ。

物寂しいよりはずっといい。

朝はおはよう、仕事から帰ればお帰りと言ってくれる。

自分とは赤の他人である人間二人にそうしてもらえるのは幸せなことだ。

問題らしい問題もなかった。

それこそあの後清子ちゃんやら望願くんから問い詰められることも、何かこそそそしていないかと勘繰られることもなかった。

そう、なかった、なのだ。

今は残念ながらあるのだ。

昨日の夜のこと、仕事…（と言ってもその日はオフィスで呉緒がデスクワークしてるのを応援するだけだったが）から帰っていざ寝ようとしている時、ヤモリ達が訪ねてきた。

何の前触れも無くきたものだから、一先ずボーナスで買ったテーブルと座布団を用意してくつろいでもらった。

なんとも落ち着きのない様子だった。

何があつたんだ？と淹れたてのインスタントコーヒーを差し出しながら聞いてみると、最近一人称が僕に変わったヤモリがおずおずと口を開いた。

あ、あのさ。

大兄貴は…区の頭になる気、なんてないかな。

僕は、自分でなつても良かったんだけど、やっぱりこの区が安泰になつたのも大兄貴のおかげだし…。

それに！

今回みたいなのがまたあつたらいけないから！

強いだけじゃない、カリスマってやつが大兄貴にはあるから！
ど！どうかな!!？

…意外や意外。

まさかそんなことを考えていたとは思わなんだ。

しかしウタの騒動と言い、20区に入ってきてる他の区のグールの群れのことと言い、確かに最近は芳しいとは言えない環境に戻りつつある。

それは否定できない事実だ。

いいのか？

一応だが、俺はゴリラだぞ？

それに今更言っちゃ何だがハトだぞ。

区の頭って言っても立派に務まる自信はないしな。

だが、まあ嫌かと聞かれれば満更でもないのは確かだな。

安泰なのは俺の本意にも沿う。

俺が顔を隠すかなんかすればいいだけだからな。

正直に言えば、頭領になってくれと言われて嫌だと言えるほど隠棲的な性分ではない。

嬉しいし、なんだか大物にでもなった気分だ。

それに、すっかり言う様になったヤモリ達の姿を見て、その通りにさせてみようとも思ったからだ。

親心などといった御大層な大義は必要ない。

なんだか良い感じだと思った、それだけでも今の俺には十分だ。

ほ！本当か!!？

ツじ、じゃあ！今度の日曜までにこの区のグール連中をありったけ集めてくる！

住んでる奴らで大兄貴のことを知らない奴らはいないから大丈夫なはずだ！

結構集まると思うよ！

この区のボスが誰なのかをハッキリさせてやろう！

ハハハ！なんだか楽しくなってきたなあ！

そういうと、ホクホクした様子で連れてきていたナキ達数人で並んで「お邪魔しました!!」なんて一礼してから帰っていった。

どうか無理だけはして欲しくないもんだ。

これからの秩序だとか、制度だとか、そんな小難しいことをぶつくさ言いながら家を出て行った彼らの背中にはシャンと伸びていて、初めて姿を認めたときに感じた諦観に萎えた卑屈さや、知性の感じられない傲慢さは消え失せている。

自分がしてきたことは良かったのかもしれない、そう思えた。

ガチャリという音が響いて入れ替わる様にロマが入ってきた。

どしたの？

柄にもなく神妙な顔して？

何かあったのかにや？

ぷくくく。

心配されてしまった様だ。

神妙な顔、を今俺はしているらしい。

「ウガー〜どーして笑うんだよ〜」とロマは俺の体にしがみ付いてきた。

眉が八の字のロマを掴んで正面に回した。

ギョツと抱きしめてみた。

頬を膨らませて怒っていた顔はすっかりポカンとしていて、間の抜けたそれには生来の彼女の可愛らしさがある。

気を取り直した様に一度顔をフルフルと振って見せた。

わざわざ頬を膨らませて抱き返してくれた。

ふんっ！

可愛らしい怒り方だこと。

彼女が俺の胸元に頭を押し付けているせいで、くぐもって聞こえた。

何をするともなく暫く身を寄せ合っていた。

振り返ってみれば、二人でいると色々賑やかな日常だ。

久しぶりにゆつくりと時間を浪費した。

何をするともなく時を垂れ流すのは、全く退屈には感じないと教えられた一日になった。

何にも考えずに抱き合っていたら、自分の体に縋る力が緩んだ気がした。

先ほどから借りてきた猫みたいになっていたロマは、すっかり夢の中の様だ。

彼女には助けられてばかりだと思う。

いつもありがとう、だな。

おやすみ、ロマ。

20区的首領

基本的にグールという生き物はヒトに紛れている。

どうして紛れていられるのか？

食べるもの以外、ヒトという悪虐非道な小動物と比べても外見に大きな差は無いからだろう。

そして何より、そもそも話彼らは何方も人間に過ぎない。

ヒトを食べるかブタを食べるかの違いは単なる生態系、もしくは宗教の違いに過ぎない。

代替しがたいことは同じであるが、そういうものもある、という擦り合わせは不可能ではない。

あいも変わらず、それをしないで争うだけの間柄なのだ。

どちらが化け物かどうかで言えば、どちらが時のマイノリティーになるのか、数の多さ少なさは大きな要因だろう。

まあ、そんな所だ。

今日集まってもらったのは他でもない。

今後のここ、20区の話だ。

お互い程良い距離を保って平穏に暮らそう、そういう話をしに態々来てもらったんだ。

今までのココは無秩序だった、他と同じだったと言った方がいいかな。

トラブルの原因は二つ、まずは生存に必要な要素を求めての闘争、二つ目はある感情のしきい値が激しく昇降した時におこるパニック。

基本的にこの二つに限る。

一拍置いて周りを見渡す。

白い壁で清潔感のある執務室、黒革張りの椅子はさぞ高価なことだろう。

まさかまさかの面々を、よくヤモリも集めたもんだ。

上を見上げれば豪華なシャンデリアが眩しい。

周りの数々の調度品にも目が行きがちだが、俺たちの足元に敷かれているのは、なんとなんと熊さんの毛皮だ。

オーク調の木でできた御大層なテーブルの上には光を通して場に粒子を飛ばすみたい綺麗なシャンパングラス、高そうな酒瓶に芸術っぽい絵が一枚一枚に描かれた銀の食器。

燭台も銀、ナイフとフォークも銀、皿に至っては金が張ってるものもある。

最後に正面、俺とは対になるお誕生日席に座っているムツシユを覗く。

靴はピカピカ、背広はピチリと音がしそうだ、口元の髭と丸メガネの紳士が今回の会議場を提供してくれたらしい。

月山く観母っ！

はっはっはっ！

ヤモリ君よ！君は何処で知り合っただのかね？

俺がちよくちよくしていた事は、案外デカイ波を起こしていたのかもしれないな。

今はこれくらいにして、そろそろ話の続きをしようか。

俺はこの二つを何方もこの区から減らしたい。

根絶やすことなんざできやしない。

人間の営みの中で生まれる副産物に過ぎないからな。

大きな営みの中で、副産物を気にしては滅びるのみだ。

では、我々は何をすべきか？

俺の考えは至ってシンプルだ。

もつとでかいモノがあればいいだけだと思ふのだよ。

突拍子もない？支離滅裂？

確かに一理ある、しかしだな、俺の言うそれは中立というやつだ。デカイ中立があればいいんだ。

この場合は殊更な、両方が頼れる強い中立が一つだけあれば良い。より具体的に言おう。

俺がこの区の保護者になる！

シーン。

そんな感じだな。

肝心の他の連中も如何やら久々言い始めたな。

権益というものは面倒くさい。

変に学がついて複雑なことを考えだすと、利益というそれまで見えていなかったものが見えてくる。

周りの奴らとどれだけ見えるのかを比べて優越感に浸って、その差がだんだん埋められるもんだから、そのうち満足できなくなる。

小物と大物の違いは、それを実際に物質化、形質を持たせられるか否かだろうな。

至極小物につき人間の取り扱いには注意すべし、だな。

君はハトなのはどうしてこんなことを思いついたんだい？

のそく、といった感じの声で俺に問いかけた。

観母だ。

そうした方が俺の気分が良いからな。

あと、俺みたいなゴリラにとってはヒトのどうでもいい損得なんかより、もっと動物的で本能に従い生存努力を怠らないグールの方が、今は好きな気分だからだ。

過程も御託も何もかもすっ飛ばして言ってやった。

20区の各地域から来たリーダー格の連中は、すっかり毒気を抜かれたみたいに目をくりくりとさせて俺を見た。

観母は何だか不思議なものを見た様な、楽しそうな雰囲気になっていた。

若い男が立ち上がった。

乗った。

俺はアンタの言う保護者ってヤツがなんなのかは分からない。
アンタがハトだっていうことも知ってる。
ましてやトンデモない腕利きの化け物だったこともな。

動揺が走り、空気がピリついた。

だけどよ、他の奴らと喰い場を巡って争うことがパツタリなくなつたのはアンタのおかげだったこともわかる。

なんの目的なのか、あんたになんの得があるのか、どうやってそうしてるのか、わからないことばかりだ。

だからこそ、アンタが俺たちに、俺と妹が、殺し合わずに食っていきけるようにしてくれた。

アンタは肉をくれた、その事実しか俺は知らない。

それしか俺たちは知らないはずだ。

そして、あれ以来いつも定期的に、アンタとアンタの仲間連中は食べるものを俺たちにくれる。

俺はそれしか知らないが、今前よりずっと穏やかに生きていられるのはアンタのおかげだ。

だから、アンタが保護者になつてくれるってんなら、他の奴らがココの王様なんかになるよりもずっと良い。

俺にできることは余りない。

強いて言うなら、喧嘩に少しは強いくらいだ。

だけど、それでも良いならアンタのために俺を使ってやってくれ。
少しでも良い暮らしに、今よりもっと良くなるなんて夢見たいじゃないか。

誰も俺たちを見ていなかった。

でも今はアンタがいる。

俺は信じたい。

そうして長く重々しい演説が終わった。

俺のことをそんな風に見てくれていたとは感激だが、俺にできることの中に自分の筋肉を人肉に変換できる不思議。パワーがあっただけだ。

力を無駄にするのは、お得と限定が大好きな元日本人で現ゴリラの俺には難しかったんだ。

結果としては上々かもしれないな。

彼の高説は周りの連中の団結を呼んだらしい。

そう言えば、名前を聞いていなかったな…

名前は？

れんじ。

四方 蓮示だ。

よも、れんじ…か。

宜しく、蓮示。

俺は、フレッドなんて言われている。

ゴリさんと呼んでくれても構わない。

あつ、それはそうと…ウタという男を知っていたりするか？

コクツ…

すごく嫌そうな顔でうなづいたな…

そうか…じゃあ、尚更ヨロシクだな。

…？あ、ああ、よろしく。

このまま話がまとまるといいのだがなあ…

幸先はよし。

心強い味方が増えたと言えよう。

問題はやはり、どうして観母なんていうヒトの社会に潜んでる様な大物が、わざわざ危険を冒してまでいかにも怪しいハトの怪物捜査官主催の会議に出席しているのか、だな。